

# 清末探偵小説史稿(三・完)

—— 翻訳を中心として ——

中 村 忠 行

## (三) 大陸の作家と作品

——ガポリオー；デュ・ボアゴベイ；ルブラン；ルルー——

この辺りで、大陸の作家達——といつても、フランスの両大家ガポリオー(Émile Gaboriau. 1832-1872)とデュ・ボアゴベイ(Fortuné du Boisgobey. 1824-1891)が中心となるのだが——の華訳を、一寸覗いて置かう。実を言ふと、この二人の作品は、黒岩涙香訳から重訳されたものが、半ばを占める。本稿では、それを分つて説明したいと思ふのであるが、それには若干の理由がある。それは、涙香訳の多くが翻案で、時としては創作に近いものすらあるといふばかりではなく、かうした方法を採用することの方が、清末文学史上に占める日本文学の位置を、より鮮明な形で浮彫りして呉れると思ふからである。

さて、この二人の作家のうち、前に紹介されるのはデュ・ボアゴベイで、一足遅れてガポリオーも紹介される。が、フランスの探偵小説と言へば、まづガポリオーに指を屈するのが通説だから、この方から筆を起しても、差支へあるまい。

ガポリオーについては、殆んどの探偵小説史が、大なり小なり触れてゐるし、手近かなところでは、ヘイクラフトの『娯楽としての殺人』(Haycraft: "Murder for Pleasure.")やそれに拠つた江戸川乱歩氏著『海外探偵小説作家と作品』・九鬼紫郎氏著『探偵小説百科』等にも要を得た解説があるので、纏説する必要を認めない。ソーヨンの公証人の子として生れた彼は、父の希望に

叛いて騎兵隊に入り、除隊後は運送会社などの雑役に雇はれて、やや奔放な青春の日を送る。が、やがて当時ジャーナリストとして知られてみたポール・フェヴァル(Paul Feval. 1817-1887)の知遇を得て助手となり、時には代筆をするなどかなり酷な仕事に従った。身体の酷使は、彼が流行作家となつてからも続き、彼の短命も過労がその主因であつたといふ。

彼は、処女作『ルルージュ事件』(“*L’Affaire Lerouge.*” 1866)で、一躍文壇の寵児となつた。この小説は、世界最初の長篇探偵小説として輝しい榮譽を担ふが、それも実は廃刊の日も迫つた『ル・ペイ』(“*Le Pays.*”)紙に連載されたものである。彼はこの小説で、タバレ爺さんといふ素人探偵を登場させる。非常な金持ちで読書家。日頃は、「ある警官の回想録」を読んでみてヒントを得、事件の解決に当るといふ趣向である。これには下敷があつて、当の回想録とは、当時評判であつた『怪盗ヴィドックの回想録』(F. E. Vidocq: “*Memoires de Vidocq, Chef de la Police de Sureté, Jusqu’en 1827, Paris, Tenon. 1828-29*)を指すのだといふ。ユージーヌ・ヴィドック(François Eugène Vidocq. 1775-1857)は、大革命時代が産んだ奇物。詐偽・強盗などで逮捕・脱獄を繰り返して、一時はパリ市民を恐怖させるが、後に改心して、警察に協力し、漸次申し上つて司法長官になり、パリ警察機構の改革まで手を染めたといふ経歴を有つ。その回想録は、ユーゴー(Victor Hugo, 1802-’85)・バルザック(Honore de Balzac. 1799-1850)はじめ、海を越えてはディケンズ(Charles Dickens. 1812-’70)やポウ(E. A. Poe. 1809-’49)なども愛読して見たことは、既に先学の指摘するところである。

ガポリオーは、続く『書類百十三号』(“*Le Dossier No. 113.* 1867)で、前作ではタバレ爺さんの脇役であるに過ぎなかつたルコックを主役に立て、『オルシーバルの犯罪』(“*Le Crime d’Orcival.*” 1867)・『ルコック氏』(“*Monsieur Lecoq.*” 1869?)でも、この若い探偵を活躍させる。彼も亦前身は犯罪の経歴を有つ探偵なのだから、この辺にも怪盗ヴィドックの面影が残つてゐる。

閑話休題。華訳となつたガポリオーの作品は、次の通りである。便宜上、重

訳も含めて、年代順に表示しよう。

- | (華 訳 名)  | (原作者)                    | (華訳者)            | (発行所)            | (刊 年)                               |
|--|--------------------------|------------------|------------------|-------------------------------------|
| 奪嫡奇冤 二冊  | [佚 名]                    | 商務印書館訳印          | 商 務              | 光緒二十九年<br>(1903)                    |
| (黒岩涙香訳『人耶鬼耶』の重訳。原作は、“ <i>L'Affaire Lerouge.</i> ” 1866)                                  |                          |                  |                  |                                     |
| 寒桃記  | 日・黒岩涙香 <sup>(ママ)</sup> 著 | 呉禱訳              | 商 務              | 光緒三十二年二月<br>(1906)                  |
| (黒岩涙香訳『有罪無罪』の重訳。原作は“ <i>La Corde au cou.</i> ” 1873)                                     |                          |                  |                  |                                     |
| 少年偵探 三冊  | 法・愛米加漢魯                  | 寄生虫<br>無腸合訳      | 小説林社             | 光緒三十二年一<br>三十三年<br>(1906—1907)      |
| (未見。原作は、“ <i>Monsieur Lecoq.</i> ”)  |                          |                  |                  |                                     |
| 毒 薬 罇  | 法・嘉波留                    | 商務印書館訳印          | 商 務              | 光緒三十三年八月<br>(1907)                  |
| (“ <i>The Mystery of Orcival.</i> ” 1887, tr. from “ <i>Le Crime d'Orcival</i> ” 1867)   |                          |                  |                  |                                     |
| 第一百十三案   | 法・加宝耳奧                   | 陳鴻璧訳             | 『小説林』自一期<br>至十二期 | 光緒三十三年正月<br>一四三十四年九月<br>(1907—1908) |
| (宣統二年単行、二冊。“ <i>File No. 113.</i> ” Translated from “ <i>Le Dossier No. 113.</i> ” 1867) |                          |                  |                  |                                     |
| 情 天 孽 障  | 法・賈波老                    | 晴嵐山人訳            | 『新小説叢』自一期<br>至四期 | 光緒三十三年<br>一三十四年<br>(1907—1908)      |
| (未完。“ <i>File No. 113.</i> ”)  |                          |                  |                  |                                     |
| 李覚出身伝  | 三十二回<br>四冊 法・加破虜         | 陸善祥訳・<br>邱菽園評註改訂 | ( ? )            | 宣統三年<br>(1911)                      |
| (未見。“ <i>Monsieur Lecoq.</i> ” 1869)   |                          |                  |                  |                                     |

如上の理由によつて、前二者は此処では省く。

『少年偵探』は、『小説管窺録』に次の様な記事があつて、原作推考の手掛りを与へて呉れる。

少年偵探 三冊全 本社発行

是書自第一章至第二十二章、絞酒室中械闘殺人案起之原因。自第二十三章至四十二章、追絞老公爵時与楽希納交渉、横暴無礼而楽希納父子報仇慘殺、以致彼此同歸於尽。結尾始回顧少年偵探羅高、見公爵証明前事而案結。

ドイルは、ホームズをしてルコックを「哀れむべき無器用者」と酷評させたが、それはガポリオーの探偵小説が本来家庭小説的な面を有ち、犯罪に至るまでの家庭内の情事や秘密に筆を弄することが多く、本格派の推理小説の様に緻密で論理的に構成されたものではない不満を洩したものであらう。『管窺録』の筆者が臆げながらもそれに気附いてゐるのは、注目されてよい。因みに、阿英氏

の書目には、今一篇林少琴訳『少年偵探』（宣統二年、上海中興社刊）のあることを告げるが、彼此同一のものか否かを詳らかにしない。

『毒藥罇』は、“*Le Crime d'Orclual.*”を訳したもので、恐らく英訳からの重訳であらう。英訳にも、Vizetelly社の1885年版（“Gaboriau's Sensational Novels.”）・G.Routledge & Sons社の1887年版、同1894年版（“Caxton Novels.”）などがあつて、同一訳なのか別訳なのか、華訳はその何れに拠るか詳らかでない。又、本邦初訳とされる丸亭素人の『大疑獄』（明治二十五年、今古堂・金桜堂刊）との関係も、披見し得ぬ儘に未調査である。物語は、遊蕩で金を使ひ果し自殺寸前にまで追込まれた男が、友人の伯爵に助けられる。しかも、彼はその恩に酬いるどころか、却つて伯爵の財産と美貌の夫人を奪はうとする。男の奸計と妻の不倫を知つた伯爵は、死の床で二人への怨みを晴らす——といふ筋だが、例によつて作者の饒舌が多い。華訳は全二十六節、勿論大意訳だが、斧鉞の跡に斑があり、甚しきは、一節を三四頁位に圧縮してしまつた個所がある。訳文は平易だが、少しく粗い。例として冒頭の一節を示す。



哲姆攀德与其子名腓力者，居垂雪弗村。父子共操一小舟。以刼掠為生。一千八百六十年，七月一号，天方破曉，二人各携器械，赴西姆河边。蓋彼等操舟往来，必過伐勿理村，是村屈来馬伯爵府第在焉。時小舟適停河干。哲姆父子既下舟，見舟中有積水。欲取杓辱而出之，忽視杓質朽損，不堪応手。哲姆呼謂其子曰，腓力，汝盍赴岸伐取一木，以修此杓。腓力応命，即一躍登岸，竟往伐勿理草園，繞伯爵府第而行。約步数十步，更踰一壕，見壕旁有枯柳一株，倒垂及地。方欲取刀進伐，忽又見垂柳之側，厯然臥一物，半橫於水。怪之，乃狂呼其父曰，父，速来。其父哲姆遙聞其声曰，何事。腓力又大呼曰，父其速来。請視此。哲姆知有異，遂急往其処，視之。見壕边蘆葦中有一女屍，身衣白羅衫，血泥狼籍殆遍。上半截倒臥水中，頭面俱不可見。腓力訝然曰，視此婦死状，得非被人戕害耶。其父諦視久之曰，然。汝意此婦為誰。予疑其為伯爵夫人。（第一節 詢蹤）

等しく文言であつても、林琴南などの訳文とはまるで違ふ。訳者は留学生か何ぞであらう。因みに、この小説は、商務版『説部叢書』第七集第八編（初集本、第六十八編）に収める他、『小本小説』にも収められてゐるから、かなり広く読まれたものと考へられる。

『第一百十三案』は、当初『小説林』に訳載されたが、同誌の廃刊によつて完結に至らず、宣統二年完訳の上改めて同社から単行上梓された。訳文は、原文の二章乃至三章を一章に圧縮し、会話なども地の文に移した形のものとなつてゐるが、まづ良心的な翻訳と言つてよい。

畢柏魯被禁至今九日矣。是日為禮拜二早晨，獄吏入告，以判司所判決。仍領至前日被逮時，搜其衣囊之吏前，還其時表小刀及零碎物。命其在一紙上簽名。然後引之出一暗巷，啓門，促之出，僅旋踵。門即闔，視之，則在聖河畔之碼頭處。孑然一身，絕無行人。噫，自由！判司已不能搜出証拋，以表其罪。噫，自由！伊可以隨其所欲之，呼吸自由之空氣矣。然家家當以閉門羹相待。嗟呼曾子殺人，賢母投杼。何況尋常酒肉之交耶。惟定案後，始能復往日之名譽。往來親友中，若案懸未決，則物議郡疑，其酷也，尤烈於日對獄中之四壁。柏魯至此，雄心頓挫，麤然嘆曰，我無罪也。惟上帝寔知之。時適有二人走過其旁。聽其喃喃自語，憐之。謂其伴曰，斯人狂矣。可憫哉。柏魯是時壯志忽消。擬萌短見，聖河滔滔，忿投於中，以了此身世。既而又轉念曰，否否，吾不應自殺。吾必証明無罪而後死。在獄中時，日夕惟思復仇，常恨吾何故不能自由，竟如籠中之鳥。欲有為而不得，使吾一朝被積，吾必復仇以雪此恥。嗟乎，今非其時耶，非竟被積，亦不覺所擬議之難。凡案之出，必有一犯罪者，設不能覓出真犯，則自己之罪，終不能洗刷，然則如何能得真犯。一至要問題也。柏魯於時雖無成見，然亦未十分絕望。隨向故居去。（第六章）

訳文は少々原文を離れて走り過ぎた観があるが、確かにガボリオーの小説の一面は捉へてゐる。少くも、これまでに華訳された探偵小説の中で、これほどまでに心理描写に筆を弄した作品はないであらう。さうした点でも、ガボリオーの小説の紹介は注目されるのである。因みに、訳者に女性の名を用ゐるのは、上述した碧羅女史（周作人）の場合と同様にこの頃の風潮で、仮托である。又、

雑誌では、各章の末に「覚我贅語」と題する東海覚我（徐念慈）の評語がある。

偵探小説、為我國向所未有。故書一出、小説界呈異彩。歡迎之者、甲於他種。雖然、近二三年來、屢見不一見矣。奪產爭風党会私販密探、其原動力也。殺人失金竊物其現象也。偵探小説數十種、無有挾此範圍者。然其擅長處、在布局之曲折、探事之離奇、而其缺點、譬之構屋者、若堂、若室、若樓、若閣、非不構思巧絕、佈置井然、至於室內之陳設、堂中之藻繪、敷佐之簾幙屏榻金木書畫雜器、則一物無有、遑論雕鏤之精粗、說色之美惡耶。故觀者每一覽無余、棄之不顧。質言之、即偵探小説者、於章法上占長、非於句法上占長、於形式上見優、非於精神上見優者也。善讀小説者、當亦隨余是言。本書之第一章、其上半則一尋常銀行被竊案耳。所失之三十万法郎、必非傅安德所竊、亦非畢柏魯所竊。余觀叙二人之容貌辭氣、則固已知之。想讀此書者、亦必能見及此。其特色處、即在後半傅安德對書記長之語。其句法則委曲仁厚、其精神則奕奕如生。此等動人性情之語、於家庭教育小説中、尤不多見、不意於偵探小説中遇之。是書之所以為傑作也。（第一章末尾）

といった調子のもので、時人の探偵小説觀を窺ふ上で甚だ興味深いものがあるが、今は略して簡に従ふ。

『情天孽障』は、阿英氏の書目でも増補版に、「補遺」として初めて収録された。『新小説叢』は、林紫虬を主編に香港で出版された翻訳小説中心の雑誌で、当時シンガポールに僑居してゐた邱焯菱（菽園）・王星如などが筆を振つた。光緒三十三年（1907）十二月創刊。毎期二百頁に近い大冊であつたが、収支償はなかつたか、文字通り三号雑誌で終つたらしい。<sup>1)</sup> それだけに、今日では珍しい雑誌とされ、管見に入つたのも、香港中文大學図書館所蔵の第二期（戊申年元月）と第三期（戊申年五月）の二冊に過ぎない。

却説、『情天孽障』も亦『書類百十三号』で、矢張り英訳からの重訳であらう。披見し得たのは、

第三回 困跡監牢憐生意外 愴懷身世灰尺雄心

1) 阿英氏『晚清文芸報刊述略』（上海古典文学出版社、1958）p. 35「新小説叢」参照。尚、同氏編『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究卷』に、林文聡「新小説叢祝辞」・邱焯菱「客雲廬小説話」などを収める。

第四回 情深舐犢妄擬傾家 意感啼鳥終期出獄 (第二期)

第五回 助夫謀主婦防客婦 從妻教小巫見大巫 (第三期)

の三回で、全体を品評するのは不倫の謗を免れないが、まづまづの出来と言つてよい。訳文は、陳鴻璧訳と較べると、聊か占風で垢抜けしてゐないが、簡潔な良さがある。例に倣つて、訳文の一端を示さう。

范鞠射作別去後、李進臥房、摘去金絲眼鏡、除去假髮一時。衆人所識之李覚、現出本来真面目、是一美少年、広額高額、両目灼灼如火。対鏡理妝鏡前小桌、陳列各種色粉香皂假髮假鬚、色色俱備。李執小掃、細細勻掠、不移時、又是焦氏所遇之赤面赤鬚之胖人。対鏡四照已畢、自語曰、各事俱備、今日可以用計矣。但願范化律謹守所囑、勿耗時刻。范出門直向府署、至時尚候一句鐘久、府官始至。范即將李覚所言所為、作自己所查所試者、細細稟白、又將影函呈上。府官聽畢曰、既然如此、我今日疊成文案。明早將犯人釈出。於是執筆書曰、

准第一百二十八条刑律控告、布露土之証拋、未足仰司獄官、即將該犯人釈放。

書畢、謂書記曰、此又一難破之案也。可將案卷編明号数、置諸待查之列。

書記遂將文件封、好標記其上曰、第一百一十三宗。(第五回)

訳者晴嵐山人とは陸善祥のこと。好んでフランスの探偵小説を訳した。或いは、幾分かフランス語に通じてゐたかも知れない。既に陳鴻璧訳もあることとて、『情天孽障』は完訳に至らなかつたものと見られるが、彼は更に筆先を転じて『ルロック氏』(“*Monsieur Lecoq.*”)を訳出し、邱菽園に潤筆を求めた。『李覚出身伝』がそれである。

『李覚出身伝』も未見に属するが、幸い阿英氏の『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究卷』に、邱菽園の序と遙遊の評語を取めてゐて、概要を窺ふ参考になる。

……友人香港陸晴嵐、嘗自六千里外郵致近訳『李覚出身伝』、殷以相属、辞之不可、迺発全扁、商兌加密、日既卒業、撮其大意於総序曰：此書之允称奇情者五。一結構、二筆法、三宗旨、四事实、五詞藻也。今夫説部雖多、結構凡二、或取裁著述、如昔之『水滸伝』・『金瓶梅』、或仿效割記、如近之『聊齋誌』・『新齊諧』。是作章回、至三十有二、固師前之長者。惟其匠

心独運，幹中有幹，支中有支，以李覺為幹，而偽五月則幹中幹也，以馬利安為支，而老利毡尼・伊士哥和伯・葛都尼侯三家人，則支中支也。此是大營包小營法，須看他步步為營，好整以暇，指揮若定之真本領。又若五城十二樓，空中現之，天風散之，但留印各人之腦筋，無處尋煙雲之陳迹，技至乎此，良云無憾。然或高才而不能細心，洪流而不能曲折，篇章之間，殊少余味，猶未盡善也。……（中略）……書為伝李覺，而李覺以對於馬蘇侯而顯，馬蘇侯以逼於利志安而來。李覺為偵探要素，馬蘇侯為写情中堅，而利志安實為彼兩方之樞紐。故欲諗書中宗旨，利志安其奕奕有神矣。吾聞諸西俠，則有維羊氏之說曰，加對家以暴烈之行為，乃吾人正当防衛法，惡來害己，己必反之，是以直報者也。次，馬沙耳曰，凡欲得真實之平等，惟有捐棄目前一切，彼障礙吾之進行者，誓當擊碎之。三，古路流曰，無人可為吾意中之主人。四，彪修氏曰，恐怖者，政治行為之利器也，當非常之際，必須用之。五，巴枯寧曰，吾党唯物家也，無神論者也，而以唯物家・無神論者為良貴者也。六，拉瓦耳曰，為求幸福，無論施何種之手段，社会不能過問。七，來佈由曰，吾人之戀愛，宜取自由主義，勿為法律禮儀所束縛。八，日內華會之党章曰，敵与敵遇，万不能以兩立，吾人当先向彼宣戰，勇往直前而莫退。九，高潮雪曰，兩間最可惡者為權力，以其絶對的，無容平等之地也。權力之所司者維何？無非以其為命令之主，而使人服從焉，烏得為平等？十，恐怖党之恒言曰，目的認手段。吾觀夫志安，於此十義，均各有當，李覺・蘇亦俱有其一体，讀之而興頑立懦之志油然而生，明恥勵行之思，怦然而動，此書真不苟作矣。……（下略）……

今日の眼からすると、聊か奇異に映るが、流石に見るべき個処は見てゐる。邱菽園は、「新小説品」（『客雲廬小説話』卷四）の著者として、当代に知られた小説通であつた。

ガポリオーが、フランス探偵小説の始祖として人々の記憶に残つてゐるのに対し、フランス本国では殆んど忘れられ、却つて日本で今尚幅広い読者層を有つのは、デュ・ボアゴベイであらう。彼は、ガポリオーと並んで、ナポレオン三世治下のフランスを代表する大衆小説家で、かなり多くの作品を書いてゐる



が、詳しい伝記は訣らない。僅かに、ロレンツ：ジョルデル共編の『仏蘭西図書館総覧』(Lorenz et Jordell: “*Catalogue général de la librairie française.*”)や旧版の『世界百科辞典』(“*The New International Encyclopedia.*” 1921)などに若干の所見があり、それに基づく先学の研究がある。<sup>2)</sup> それに拠ると、彼は、1824年マンシュ県のグランピールで生れ、廿歳の時に陸軍省に務め、経理部員として働いた。その間、アルジェリアに出張したり、中東諸国を遊歴したこともあるといふ。小説を書き始めたのは、四十歳を超えてからで、処女作『二人の喜劇役者』(“*Duex Comédiens.*” 1868)では余り認められなかつたが、『囚人大佐』(“*Le Forçat Colonel.*” 1872)が成功を取めた頃から注目され始め、作家として漸く自立する様になつた。当初、彼はポウやガポリオーに私淑し、ポウの『マリー・ロージェの秘密』(“*The Mystery of Marie Rogêt.*”)に倣つたミステリー小説『マリー・ローズの隠れ家』(“*Les Cachettes de Marie-Rose.*” 1880)やガポリオーの生んだ探偵ルコック氏を借用に及んだ『ルコック氏の晩年』(“*La Vieillesse de Monsieur Lecoq.*” 1878)を書いた程であつたが、決して小さな孫生ひこぼえに終らなかつた。ポウに習ひつつも長篇小説に志し、又ガポリオーが通俗家庭小説に安住したのに対して、歴史の中に素材を求め、新しい時代小説の分野を開拓することに努めた。彼が好んで扱つた時代は、ルイ王朝末期から大革命時代にかけてであつた。大仏次郎の『パリ燃ゆ』の種本ともなつた『外ひそニューズ伝赤色党』(“*La Bande Rouge.*” 1886)はじめ、『恐怖時代の娼婦達』(“*Le Demi-Monde sous la Terreur.*” 1877)・『美人の手』(一名『片手美人』, “*La Main Froide.*” 1889)・『鉄仮面』(“*Les Deux Merles de M. de Saint-Mars.*” 1878)等々、すべてさうである。この時代の史実について彼は該博な知識を有してゐたらしく、それを駆使しての創作手腕も亦確かなものであつた。現に、木村毅博士の如き、「探偵・犯罪ばかりでなく、広汎にわたつて社会万般に取材すること、純文学におけるバルザックの様な大手腕」<sup>3)</sup>とまで、高く評価する先学さへある。大衆小説家として、

2) 江戸川乱歩『海外探偵小説・作家と作品』, 木村 毅「ボアゴベのこと」(筑摩版『明治文学全集』47「黒岩涙香集」解題)その他。

3) 木村毅氏「ボアゴベのこと」(前掲解題 p. 382)

これも優れた鑑識眼を具へてみた黒岩涙香が、彼の小説を好み、十六篇も翻案してゐるのも、亦故ある哉。

さて、デュ・ボアゴベイの作品で華訳されたものには、次の様な作品がある。

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
美人手	〔佚名〕	香葉閣鳳仙 女史訳	『新民叢報』自三十六号 至八十五号	光緒廿九年六月 至三十二年七月 (1903-1906)

後、広智書局より単行上梓。二冊。

(黒岩涙香訳『美人の手』の重訳。原作は、“*La Main Froide.*” 1889)

紅茶花 <sup>十六回</sup>	法・朱保高比著	陸善祥訳	香港・聚珍書樓	光緒三十一年十月 (1905)
--------------------	---------	------	---------	--------------------

(未見。原作は、“*La Bande Rouge.*” 1886)

指環党	〔佚名〕	商務印書館訳	商務	光緒三十年十月 (1905)
-----	------	--------	----	-------------------

(黒岩涙香訳『指環』の重訳。原本は、“*L'Oeil du Chat.*”)

決闘会	〔佚名〕	小造訳	『新新小説』	光緒三十一年 (1905)
-----	------	-----	--------	------------------

(黒岩涙香訳『決闘の果』の重訳。原作は、“*Les Suites d'un Duel.*”

英訳名 *The Consequences of a Duel.*)

決闘縁	法・佚名著	同文滙報館訳	同館	〔刊年未詳〕
-----	-------	--------	----	--------

(『同文滙報』の性格から言つて、前項の別訳と見てよい。)

巴黎繁華記	〔佚名〕	商務印書館訳	商務	光緒三十一年十月 (1905)
-------	------	--------	----	--------------------

(黒岩涙香訳『玉手箱』の重訳。原作は、“*Porte close.*” 1885 といふ。)

秘密囊	〔佚名〕	小造訳	『新新小説』	光緒三十一年 (1905)
-----	------	-----	--------	------------------

(黒岩涙香訳『武士道』一名『秘密袋』の重訳。デュ・ボアゴベイものといふが、原作未詳。)

鉄仮面 三冊	法・波殊古碧	聴荷女士訳	広智	光緒三十二年九月 一同三十二年十月 (1906-1907)
--------	--------	-------	----	-------------------------------------

(黒岩涙香訳『鉄仮面』の重訳。原作は“*Les Duex Merles de Monsieur de Saint-Mars.*” 1878)

劇盜遺囑	法・朱保高比	林紫虬 李心靈合訳	香港・聚珍書樓	光緒三十三年十一月 (1907)
------	--------	--------------	---------	---------------------

(英訳名 “*The Felon's Bequest.*”)

色謀図財記 二冊	日・涙香小史	黄山子訳	改良小説社	光緒三十三年 (1907)
----------	--------	------	-------	------------------

(未見。黒岩涙香訳『似而非』一名『悪党紳士』の重訳か。とすれば、原作は“*Bouche Cousue.*” 1883 であらう。)

- 天際落花 日・黒岩周<sup>(マツ)</sup>六著 褚靈辰訳 商務 光緒三十四年五月  
(1908)  
(黒岩涙香訳『塔上の犯罪』の重訳。原作は“*La Voilette Bleue.*” 1855)
- 八嬭秘録 法・朱保高比 李心靈<sup>リ</sup> 林紫虬<sup>リ</sup> 訳 『新小説叢』第一期以降 光緒三十三年一  
同 三十四年  
(1907-1908)  
(“*Le Secret de Berthe.*” 1884?)
- 巴黎麗人伝 法・白華哥比著 張万字訳 『国風報』第二卷第廿九号以下 宣統二年十月  
廿一日  
(原作は“*Bouche cousue.*” 1883)

前例に倣つて、涙香物の重訳は後に譲る。

まづ、『紅茶花』(未見)であるが、阿英氏の『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究卷』に、題詞二題を収める。

一

潘 飛声

悩煞遺難語未通，艱危劍氣走豐隆。英雄甘任恩仇報，祇在佳人一笑中。  
羅刹紅茶幻影幽，蛇針酒穿屢殲仇。白人智巧徒爭競，一点神燈已碎舟。  
冷舟高樓泣素衣，侯門風景尚依稀。即今聚首鄰家屋，草地安閒話落暉。

二

賀 彝

变幻離奇色亦空，欲將首尾擬神竜。满腔熱血憑君灑，却在秋波一轉中。  
俠態狂情激射來，那知樂處寓悲哀。可憐絕代如花女，一縷遊魂下劇臺。  
孤雛如子口如瘡，拋撇歧途太忍心。不有解人甘任俠，盤冤長此九淵沈。  
記曾變相說金剛，竟使神姦不可方。却笑尚疎施毒針，蛇針到底露鋒鋦。  
屢蹈危機命若絲，果能雪恨又何辭。花魂喚起應含笑，一彈遙飛貫臆時。

(原載『紅茶花』卷首)

この題詞から推すと、原作は『<sup>コン</sup>ソニエ<sup>ム</sup>赤色党』(“*La Bande Rouge.*” 1886)であることは、想像して誤りあるまい。訳者陸善祥には、上述の如くガポリオーの翻訳もあつて、多少はフランス語に通じてみたかと思はれるけれども、華訳は英訳“*The Red Band ; or, the Siege and the Commune.*” (1887)からの重訳であらう。

次に、『劇盜遺囑』は、表紙に『フェロン氏の遺囑』(“*The Felon's Bequest.*”)とあるから、英訳からの重訳であることは明らかだが、原題名を何と言ふかは、未だ突き止めてゐない。蓋し、この作品名乃至はそれらしき作品名が、

管見に入つた二三の書誌や大英博物館の蔵書目録等に見当らぬからである。華訳は、卷末に「此書原本西文、為心靈氏述給紫虬氏筆牘、演繹華字、共編二十七回。脱稿后復郵星洲、請菽園居士校定之、因刪削繁重、增飾章段、以就祖国歷來小説範圍、重加詮次為三十四、使再版以行焉云々。」とあるので、林訳小説などと同じ様に口述筆記といふ方法が採られたものであること、華訳は章回体小説の形式がとられ、その所為もあつてか、かなり刪節潤筆が施された。



従つて原作とはかなり異つた趣きを有つ作品に変貌してゐるであらうこと。その最も著しい改変は、勸懲主義の立場から謂はば「警世之書」にしてしまつた（これは原文を読まなくても、想像に難くない）ことなどが詠る。

勿論、ポウ以前の作品だから、純粋な探偵小説ではないし、スリラー小説にも程遠いものである。その筋は——冤罪で投獄された証券取引所の仲買人賈蘭惜は、獄中、二十年の刑に服してゐる大盗賊伯利から、彼が隠匿する財産を譲らうと、その所在を教へられる。やがて、嫌疑が晴れて、賈は出所するが、原の職場では誰も相手にして呉れぬ。孤児院に育ち、奨学金を得て学業を終へたといふ彼の経歴も、その立場を一層不利にした。相談に乗つて呉れるのは、新聞記者の華霹靂ばかりである。絶望した彼は乱脈な生活を送るが、ふと例の伯利の言葉を想ひ出し、一夜廢屋に忍び込んで大金を手にする。が偶然この廢屋で自殺を図つた金史露を救ふこととなる。実は、この廢屋は、銀行家であつた彼女の父の所有で、彼女も此処で育つた。不幸にも、その父が夜盗に殺されてから、家産は傾く。彼女は、造花などの手仕事を始めたものの如何にもならず、死場所をこの廢屋に選んだのであつた。二人の仲は、急速に親密になるが、同時に暗雲が二人の周辺を取巻き始める。金史露をスペインの貴族司文嘉の妾に売込まうと凶る娼婦の杜比鴉、「獅子皇后」と呼ばれる猛獸使ひの女孌蘭、脱獄した伯利など。高孌蘭は、実は伯利の娘で、親許を逃れてサーカス団に入り、今はその花形となつてゐる。賈蘭惜に慕情を寄せる彼女は、見物に來た金史露を猛獸の檻に誘ひ込み、重傷を負はせるが、賈の為にこの折も助けられる。一

方、賭博で折角手にした大金を磨つてしまつた賈蘭惜は、再び廢屋に忍び込むが、別件の犯人を追つてゐた警察の捜査網にかかる。が今度は疑はれることもなく釈放される。かくて、賈・金の二人は結ばれる。——まことに、他愛ない物語だが、資料的な珍らしさはある。

府官斯時極留神注聽，見高說得如許確實，心頗信以為然。乃照高所言，飭令二捕差，將金錢逐層逐捲，搬出点数，看看將盡。高忽連呼曰，日記簿，日記簿。一捕差應曰，完矣。底下全是細紗。高曰，如此則被人劫去矣。捕差忽呼曰，我撈得有物，我撈得有物。但不是日記簿，甚似人骨也。捕差方說出此語，衆人大為震動。偵探長，巡捕官，及巡理府，俱行近烟甸邊，洗唐雖不敢十分行近，然心中顫動，以為金錢堆下，尋出死屍，則我此次探得之新聞。又屬有一無二。惟高辣伯利則雖似見奇，然却不甚露。復自言曰，噫，不難此屍，即是銀行帶書信人馬田乎。難道我第二晚，當醉入匪鄉時，馬淘沙即將他謀死。天下竟有如此負心人。前晚方數人共事，別晚作事，即並將我瞞騙。高言時，捕差在沙內，陸續取出白骨一大堆，並在沙內搬出霉爛衣布一幅。其中有銅鈕一枚，鈕上鐫有B及C二字，則與賈蘭惜末次所取出之日記簿上，所刊字無殊。偵探長見此即曰，此二字母，即銀行被劫人之滅筆也。此時尋出之骨，諒即是銀行帶書信人之屍。高曰，不差。所料定合，馬淘沙將馬田擊斃，埋在其下。幸我不在場。若當日在場，無難並我害却。但他謀斃馬田，又不知何人將他謀。斃惟不論何人，他死亦甚值矣。他已取去日記簿內金幣，復將金錢多捲取去。豈不抵死有余。（第二十五回 奇中奇金錢埋朽骨 案外案劇盜迹遺書）

『八孀秘録』も、李心靈・林紫虬二氏の合訳に係るものであるから、英訳からの重訳であらう。「俠情小説」といふ<sup>つのがき</sup>角書がある様に、純粹な探偵小説でないことも決る。披見し得たのは、僅かに

第二章 旧友説新欲帷燈匣劍 情恨種疑竇蛇影杯弓

第三章 赴博場無心逢暴客 談命案有意涉雌孀

の二章に過ぎないし、原作と対照する機会を得ないので、全くの推測の範囲を出ないが、恐らくは“*Le Secret de Berthe.*”（『バルト嬢の秘密』、英訳名“*Berthe's Secret.*”）であらう。以下、原作追究の手掛りを得る<sup>よすが</sup>縁として、第

## 二章冒頭の一節を示す。

上章所説李波露所鍾情之雌孀馬夫人，固一販羊毛商之女，父名裴憐打以營業致富。畢生勤勞，照他所見，拳世無一完人，惟以生非世家，常思張大閨，過于所生，因是好高貪勝。曾三次運動國人，公舉他作議員，卒至三次無成。始大掃興，軫思不如將女嫁与貴族中人，以增門楣聲望。裴作是想，正非大願難償。因其女八孀，豔名噪一時，又美而慧，有奩金五十万，將來尚有百万遺產，總可希望承享，以如許重資，且兼有美名之女子，欲求一貴介聯婚，固甚易事耳。裴早繈，祇一女，愛若掌珠。幼年送入女学校，至十八歲時，出校居家，些些情性，所有世務，完全不識。有馬仙嬭伯爵者，年四十許，惟尚足以博出校少女之欲。女与伯爵，年歲雖懸殊，後見得男子以愛情相感，亦暫就協洽，且樂作伯爵夫人，由是結婚。自嫁後，女身頓作夫人，自喜甚有聲望，翁婿來往，更不待言。

最後の『巴黎麗人伝』は、英訳“*Sealed Lips.*”に拠つてゐよう。同じ英訳本から、黒岩涙香も『似而非』（改題して『悪党紳士』）を訳してゐるが、兩者直接の關係はあるまい。原作は、陰惨で筋も複雑だが、幾分か退屈なところがある。例文として、デミモンドの女の下宿先で、仕掛けられた吊り天井に女（マリイ）が圧殺されるのを、主人公が覗き穴から目撃するといふ凄惨な一節を、掲げて置く。

却説，此室專為窺人而設，恐漏光線，故無窗牖。又恐礙窺視者之潛蹤，故一無陳設。惟地上厚鋪茵毯，以便行步無聲。壁間兩穴，光線熒熒然射入，此羅甸娘子特設之機局，所以便喪節敗行之倫，偷窺鄰室，以求遂其所圖謀者也。媼至是，乃決計必一窺之，于是探手摸索而前。俄而手觸壁間，膝下亦覺有障礙物，撫之知為匡牀，上有熟褥者，即踞于其上，壁間兩穴，直接於目，中心怦怦，若有所畏怖，未敢即窺。久之乃強自鎮定，放眼一窺鄰室。但見一壯麗之牀，牀角四柱，皆作扭絲形，上承重大之穹蓋，流蘇四垂，純然古式之華美牀，而牀中不施帷帳，牀頭障版，適向對立之牆，而自孔穴窺視牀中，了無障礙。此臥室為四方形，左方設暖炉，炉上承物処，陳設古銅器及瓷器數事，右方乃一巨大之衣廚，旁設休息几榻二，別有漆木架，承二瓷檠，二燭輝映其上。初不見此中有人，久之察見一几案，上置女帽，

細弁其式様，知為適間劇場中所見者，乃知其人確已在室。又久之，始察得其在。蓋彼適負牆而坐，正在兩穴処之下方，寂然不動，垂其首，俯視壁欲驚醒之，而壁間亦厚加墊蓋，有如坐褥，雖猛擊，而依然無聲。再一窺穴，見臥者卒不少動，而穹蓋下垂之勢，則刻刻加甚，羌不知其所底止，而其機捩之巧滑円転，直若兩柔相受而無聲。媻媻視此，震駭無極。（第二回 窺比鄰奮身救同類 囚暗室設誓脫危機）

ガポリオー，デュ・ボアゴベイの時代から一時代を置いて，フランスの探偵小説界に活躍するのは，ルブラン（Maurice Leblanc. 1864-1941）とルルー（Gaston Leroux. 1868-1927）とである。清末も，光緒から宣統に移る頃ともなれば，そろそろこの二人が紹介されてもよい筈であるが，実際にそれが見られるのは，民国に入つてからのことらしい。

今，手許の資料の不足から確認するには至らないが，ルパン物の最も古い紹介の一つとしては，

（華 訳 名）                      （原作者）                      （華 訳 者）                      （発 行 所）                      （刊 年）

福爾摩斯之勁敵                      [佚名]                      心一訳                      『小説時報』第十五号                      民国一年四月五日

が挙げられるであらう。その冒頭には，「法蘭西有劇賊亜森魯品者，詐詭百出，名震全歐，不特其技有同鬼賊，而其踪跡亦殊神秘不測云々」といふ三百字ほどのルパンの紹介があるので，原作は何かと首を傾げさせられるが，

一日，竇聞置酒堡中，客為村中牧師葉禮，兩師範而蒙，及陸軍士官十余人。酒酣，主人笑顧范而蒙曰，尊容何以劇賊亜森魯品之甚也。范而蒙微愠，旋曰，誠然耶。竇聞正色曰，君誠似渠，言至是，笑而統曰，設余不知君為画師者，余且招警吏來矣，言訖大笑。一座為之粲然。已而戲曰，亜森魯品先生，堡中多古物，君設欲盜之者，盍先往一覽乎。座客益笑。竇聞乃起，導客入別一室。古物均儲其中，一壁有西盤磨斯尼門六巨字，字以木製，嵌壁上而塗以金色。巨字之下為一古書架，架中均古書画。羣客有審察古椅者，有玩弄古物之陳列几上者，有徘徊於古画之下者，有稱美不絕於口者。竇聞忽又戲顧范而蒙曰，亜森魯品，君果欲盜之者，今夕為末一夕矣。范而蒙亦戲問曰，何也。竇聞曰，翌日午後四時，英国大偵探福爾摩斯將抵此。福爾

摩斯既来，縱有十亜森魯品，尚何能為。

といった辺りまで読めば、『強盜紳士』（“*Arsène Lupin, gentleman: cambrioleur.*” 1907）中の一編「遅かつたり，シャーロック・ホームズ」であることは，すぐ訣る。華訳は，勿論，英訳に拠つたものであらう。ド・マトス（Alexander Teixeira de Mattos）の訳が，“Newnes’ Sixpenny Novels.” か何かの一冊として，いちはやく出てゐる筈である。

これに続いて，民国三年から四年にかけての『中華小説界』には，徐卓呆・包天笑合訳『八一三』（“813.” 1910）が連載されているし，中華書局版『小説彙刊』（民国六年一月刊）には，周瘦鵬訳『亜森羅蘋奇案』（選集か）・『水晶瓶塞』（“*Le bouchon de cristal.*” 1910）・『八一三』が収められてゐる。前に誤つて創作の様に記した『雙雄闘智録』も，ほぼ前後して訳出されたものであらう。これは，正しくはルブランの『怪人对巨人』（“*Arsène Lupin contre Herlock Shormès.*” 1907）であつた。蔣瑞藻の『小説考証・続編』巻四に，周瘦鵬の「懷蘭室雜俎」を引いて，次の如く見える。

英倫海峡一衣帶水間，有二大小説家崛起於時，各出其酣暢淋漓之筆，發為詭奇恣肆之文。一造大偵探福爾摩斯，一造劇盜亜森羅頻。一生於英，一生於法。在英為柯南道爾，在法為馮利塞勒勃朗。勒勃朗者，振奇人也。所為小説多種，半言劇盜亜森羅頻事。其風行於歐洲也，与福爾摩斯同，而文字思想，亦正与柯南道爾工力悉敵。法人嘗自誇，謂不讓英吉利以福爾摩斯驕人也。予居恒頗好勒氏書。其描写劇盜之行徑，真有出神入化之妙，筆飛墨舞，令人神往。所著長篇，有『亜森羅頻』・『亜森羅頻与福爾摩斯之比較』（此二書予已訳出，一名『法筵之王』，一名『雙雄闘智録』）・『空針』・『八一三』・『水晶塞』・『虎口』諸作，短篇可三十種。予嘗移訳其半，而諸書中之最有神味者，允推『雙雄闘智録』，勁敵相遇，各出其奇智以相角，擲筆空中，栩栩欲活，令読其書者，如見字裏行間，躍然有一福爾摩斯，一亜森羅頻在也。

この文は，民国十二・三年（1923～24）頃に書かれたものであらう。これによると，如上のもの他にも，周瘦鵬の訳に係る『法筵之王』（“*Arsène Lupin, gentleman: cambrioleur.*” 1907）・『雙雄闘智録』（“*Arsène Lupin contre*



*Herlock Shormès.*” 1907)・『空針』(“*L’Aiguille-creuse.*” 1910)・『虎口』(“*Les Dents de tigre.*” 1921)はじめ、かなりの数の作品が、訳出されてきたことになる。これらは、多く文言訳であつたらうが、やがて白話訳に改められ、民国十四年(1925)には大東書局から、長篇十種・短篇十八種を収めた周瘦鵬・沈禹鍾・孫了紅編『亜森羅萃案全集』が出た。

ところで、中国には、ルパン物を受け容れるに十分な素地があつた。『水滸伝』に象徴される緑林の豪傑を主題とする武俠小説の伝統がそれで、ニック・カーター物の流行なども軌を一にする。かくて、孫了紅は、「東方のアルセーヌ・ルパン魯平」を主人公とする一連の『俠盜魯平奇案』を創作するが、その中の一篇『鬼手』では、大探偵霍桑を登場させる。霍桑は、程小青が創作した「中国のシャーロック・ホームズ」で、ワトソン役の包朗によつて語られる小説の主人公である。これに劣らじと、陸澹倉は、アルセーヌ・ルパンが、中国の探偵李飛に挑戦状を送る趣向を案出(『怪函』)すれば、張碧梧は、俠盜羅平と探偵霍桑とが知謀をめぐらせて死闘を繰返す『雙雄鬪智記』を綴つた。後者が、上記の周瘦鵬訳『雙雄鬪智録』を、のつけから換るものであることは贅するまでもない。<sup>4)</sup> ルブランが、実在の人物 Arsène Lupin 氏の抗議に遭つて、主人公の名を Arsène Lupin に改め、ドイルの手厳しい批判を受けて、Sherlock Holmes を Herlok Sholmès に変へたことは一寸した逸事だが、中国では却つてそれが、読者の喝采を浴びたのである。

因みに、陸澹倉の創造した探偵李飛は、大学生の素人探偵だが、これは明らかに少年探偵ルールタビユ(Rouletabille)の変形であらう。ガストン・ルルーの作品は、さう多くは紹介されなかつたらしい。ただ一つ気になるのは、

少年偵探 林少琴訳 上海・中興社 宣統二年(1910)

だが、未見の作品でもあり、且、上記の如く同じ題名のガポリオーの作品もあることなので、俄かに判断し難い。

以上の他にも、フランス物としては、

4) 范煙橋「民国旧派小説史略」(魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料』所収)六「翻訳小説」、七「偵探小説」の項。同『中国小説史』第五章第二節「最近之十五年」参照。

毒蛇園 法・鮑福原注 知新室主人訳 『新小説』<sup>頁第八号</sup><sub>卷廿四号</sub> 自光緒二十九年(1903)八月十五日至卅一年十二月

妒婦謀夫案 法・紀善 周柱笙訳 『月月小説』第六号 光緒卅三年(1907)二月

（高竜偵探第四案。『新菴九種』所収）

紅痣案 同 同 同 同 第十一号 光緒卅三年(1907)十一月

（高竜偵探案之一案。同前。）

納里雅偵探譚 法・哈倫斯 商務・訳 商務 光緒卅四年(1908)

収「七粒珠」・「三水手」・「鼓琴図」・「寄電匣」

碧血巾 四冊 法・佚名 蔣景緘訳 時事報館 宣統元年(1909)

などがあるが、後の二者は未見、爾余のものも未だ原作を究明するに至つてゐない。

#### （四） 日本訳から重訳された作品

上に一言した様に、当代に華訳されたガポリオーやデュ・ボアゴベイの作品の大半が、黒岩涙香訳の重訳であるといふことは、彼我の文学交渉の密接なことを物語るものである。それは、決して怪しむべきことではなかつた。

ドイルの「シャーロック・ホームズもの」を、中国に最初に紹介したのは、梁啓超の編輯する『時務報』であつたこと、又それが、中国に紹介された西洋種の探偵小説の嚆矢であつたことについては、本稿の冒頭に記したところである。その梁啓超は、戊戌政変（1898）後日本に亡命し、横浜で『清議報』を創刊する。政客でもあつた彼の文学観は、極めて功利的なものであつたが、それだけに当代の人々に与へた影響は大きかつた。『清議報』に訳載された小説は、梁啓超訳『佳人奇遇』・周達訳『経国美談』といつた政治小説に限られたが、次いで創刊された『新民叢報』（光緒二十八年正月創刊）や『新小説』（同年十月創刊）になると、少年文学・科学小説・探偵小説・家庭小説と内容的にも幅を見せ、新文学の胎動を促す。これらの雑誌に訳載された小説の殆んどが、日本語から移訳されたものであることは、贅するまでもない。かくて清末民初の文壇には、明治文壇の影響が、さまざまな形で現はれる。探偵小説流行の気運も、その一である。

勿論、如上の現象の背後には、広い意味での文化（政治・経済・教育・軍事・警察など）交流がある。就中、文壇と密接な関係があるのは、書肆・出版社の大陸進出であらう。宮島大八の善隣書院・岸田吟香等の楽善堂及び勸学会・伊沢修二等の泰東同文局・下田歌子の作新社と、この種の出版社は、明治三十年（光緒二十三年、1897）頃から進出を始めるが、中でも注目すべきは、「上海商務印書館」と我が金港堂との提携であつた。すなはち、光緒二十八年（明治三十五年、1902）夏、同書館は名称を「中国商務印書館」と改称すると共に、組織を改めて合辦とし、新に編訳所を設け、折柄教科書疑獄事件に失脚して悲運を歎つてゐた長尾楳太郎（号雨山。元高等師範学校教授）・小谷重（元文部省図書審査官・金港堂編輯長）等を顧問として招き、活発な出版活動を開始する。勿論、当初は緊急を要した教科書類の出版が主であつたが、翌光緒二十九年になると、上にも引いた『繡像小説』を創刊（五月一日）、又『夢遊二十一世紀』（“*Anno Domini 2071.*”, translated from Dr. Pseud Dioscorides's “*Anno 2065, een Blik in de Toekomst.*” by Dr. Alex. V. W. Bickers., (William Tegg, London. 1871)・『売国奴』（登張竹風訳『売国奴』、原作は Hermann Sudermann: “*Der Katzensteg.*” 1891）はじめ、上述した『華生包探案』・『奪嫡奇冤』といった小説類の出版も始めるし、光緒三十二年（1906）には、世界文学全集とも謂ふべき『説部叢書』の刊行を開始し、ついで『林訳小説叢書』・『歐美名家小説』、それらの廉価選書たる『小本小説』・『袖珍小説』等々、清末までに幾多の文芸叢書を出版した。かうした出版物の中には、例へば上記『売国奴』の如く、原典たる登張竹風訳より華訳の方が先に出版されるといふ、常識では一寸考へられない様な珍本も存在するのである。

金港堂・商務印書館の合辦事業は、僅か十二年ほどで幕を閉じた。しかも、その初期に於ては、金港堂側に「教科用図書検定違反事件」（明治三十二年五月～三十五年十月）・「教科書疑獄事件」（明治三十五年十二月～三十七年六月）といふ難題があつて、原亮三郎父子は起訴される身であつたから、公表することさへ憚られた趣きであるし、民国に入つてからは、民族資本の独立経営を望む声が彼に起り、金港堂も次第に熱を失つて、遂に利権を譲渡してしまふ。か

うして、原亮三郎の懐いた夢は崩壊するが、その間に果した功績は大きい。

因みに、金港堂・商務印書館の合辦事業については、樽本照雄君に詳しい研究がある。参考すべき論文である。<sup>5)</sup>

#### (1) 徳富蘆花の『外交奇譚』

却説、明治の探偵小説で、最初に華訳されたのは、徳富蘆花訳『外交奇譚』(Allen Upward: “*Secrets of the Courts of Europe.*” 1897.) 中の諸篇である。当時、蘆花は『不如帰』の成功によつて、一躍文壇の寵児となつてみたけれども、この場合は、蘇峰の弟の訳著といふことで、親しまれたものらしい。梁啓超は、徳富蘇峰に私淑し、自ら「中国の徳富蘇峰」たらんことを期した。「筆鋒常に情感を帯びた」かの「新民体」の文体の如きも、実はマコオレイばりの文章を得意とする蘇峰のそれから来てゐることは、これ迄にも屢々指摘して置いたところだ。<sup>6)</sup>

(華訳作品名)	(華訳者)	(誌名・号数)	(刊年)
百合花	佚名	『新民叢報』十二号	光緒二十八年(1902)年 六月十五日
(蘆花訳「百合の花」。原題名 ‘A Scandal at the Elysée.’)			
俄皇宮中之人鬼	曼殊室主人訳	『新小説』二号	同年十一月十五日
(蘆花訳「冬宮の怪談」。原題名 ‘The Ghost of the Winter palace.’)			
外交家之狼狽	中国某訳	『新民叢報』第廿七・ 第廿九号	光緒廿九年二月十四日・ 同三月十四日
(蘆花訳「鉄公の退隱」。原題名 ‘Prince Bismarck’s Fall.’)			
竊皇案	中国某訳	『同』第卅三・ 第卅四号	光緒廿九年五月十四日・ 同五月廿九日
(蘆花訳「王の紛失」。原題名 ‘A Stolen King.’)			
白絲線記	披髮生訳	『新小説』六号	光緒廿九(1903)年 六月十五日
(蘆花訳「白糸」。原題名 ‘The White Thread.’)			
返魂香	喋血生訳	『浙江潮』第八期	光緒廿九年八月廿日

5) 樽本照雄氏「金港堂・商務印書館・繡像小説」(『清末小説研究』3); 拙稿「商務版『説部叢書』について」(『野草』27号), 「呉禱訳『売国奴』その他」(『中国文芸研究会会報』24)。

6) 拙稿「徳富蘆花と現代中国文学」(『天理大学学報』二輯・三輯), 同「梁啓超の文体」(『中国語学』第十五号)

(前掲「王の紛失」の別訳。原題名 'A Stolen King.')

瑪 腦 印 佚名訳 『外交報』第七十二・第七十七期 光緒卅年(1904)二月十五日・同四月五日

(蘆花訳「法王殿の墓」。原題名 'The Tomb in the Vatican.')

埃 及 妃 佚名訳 『同』第七十七・第九十二・第九十三期 同年四月五日・九月五日・九月十五日

(蘆花訳「一億万法の賭博」, 後改題「一億万法」。原題名 'The Perfidy of Monsieur Disraeli.')

紅 花 球 佚名訳 『同』第九十三・第九十六期 同年九月十五日・十月十五日

(蘆花訳「大使夫人」。原題名 'Madame the Ambadressress.')

波 斯 剪 佚名訳 『同』第九十六・第九十七期 同年十月十五日・十月二十五日

(蘆花訳「土京の一夜」。原題名 'A Seraglio Secret.')

一 条 鞭 佚名訳 『同』第九十七・第九十八期 同年十月二十五日・十一月五日

(蘆花訳「鞭の痕」。原題名 'The Honour of an Empress.')

易 児 説 佚名訳 『同』第九十八・第九十九期 同年十一月五日・十一月十五日

(蘆花訳「とりかへ子」。原題名 'Prince Citron.')

三 刺 客 佚名訳 『同』第九十九・第一百期 同年十一月十五日・同二十五日及十二月五日合併号

(蘆花訳「三刺客」。原題名 'A Royal Freemason.')

以上の内、「俄皇宮中之人鬼」は、『飲冰室專集』にも収められ、梁啓超の訳と見られてゐるが、『新小説』には「曼殊室主人訳」とあるから、麦孟華の訳であらう。麦孟華(1874~1915), 字は孺博, 号は蛻庵, 広東省順徳の人である。光緒十九年挙人に貢せられたが、やがて康有為の万木草堂に学んだから、梁啓超とは同硯の誼がある。戊戌政変後、彼も来日、梁が在米華僑の招きでハワイに赴いた後を承けて『清議報』を主宰し、又大同高等学校の校長代理を勤め、光緒三十三年(1907)には政聞社を興して、保皇立憲を唱へた。「外交家之狼狽」以下の訳者「中国某」は、これが『説部腋』(新小説社刊、光緒三十一年)に収められた際には「披髮生訳」と改められてゐるから、羅普(孝高)の訳である。羅普も亦順徳の人、麦孟華の妹婿である。戊戌政変後、彼も渡日して、東京専門学校(早稲田大学の前身)に学んだ。同校に学んだ中国人学生の第一号である。煙山専太郎著『近世無政府主義』に素材を仰いだ虚無党小説『東欧女豪傑』の作者に擬せられる他、梁啓超訳『佳人奇遇』や『十五小豪傑』(森

田思軒訳『十五少年』の重訳)の助筆も勤めた。<sup>7)</sup>

『返魂香』は、大意訳に近いが、矢張り蘆花訳「王の紛失」に拠つてゐる。参考の為に、羅普の訳を併せ掲げ、冒頭の一節を覗いて置く。

曩年欧美新聞、喧伝西班牙王約芬十三世、是閩兵婦、驟罹奇症、不省人事。太后驚痛欲絶、日夜待湯藥、王師傅奧維亞僧正、与宰相格湯、及御医二人、亦不離左右、惟以勢危故、問疾者多不許入觀。韶華駒走、惡事逼人、勿藥之喜終無日卜。時余適居駐劄西班牙法国公使之任滿、旅京城馬德里(マドリ)士。余為公使時、頗与約芬十三世雅愛。惟既挂冠、入觀亦非易事。奈何群情洶洶、恐大閔係於國際問題、不敢嫌唐突、進謁太后以觀王請、不料竟遭擯謝、怏怏歸。 (『返魂香』)

二年前某月某日、忽有電報達於欧洲各国之新聞紙館。皆称西班牙幼王阿豊瑣第十三世有疾、不能聽朝。病雖非劇、頗慮傳染。時太后攝政、自率兩侍者与王同居、親視湯藥、又下令禁絶交通。其時許出入王之病室者、侍医之外、惟師傅奧利威暨宰相鴉士他拉兩人。此消息傳播遠近、人莫不信以為真、而不知王寔非病、蓋被拐耳。有願聞其詳者、余請述之。

卻說某月某日、西班牙首都举行大閱之典、王当与太后臨觀。治駕将發、忽從郵政局飛一書至、乃遞呈太后者、表題急報二字。太后披閱畢、大驚欲絶。 (『竊皇案』)

羅普訳も周密体のものではないが、かなり忠実に原文の跡を逐つて居り、殊に平易な文章で、ふくらみのある蘆花訳の呼吸を多少なりとも写さうと努力してゐるのに対し、喋血生訳は生硬な大意訳と、対照的である。加之、喋血生訳では、「素より余は該国に駐劄したるにはあらず云々」(蘆花訳、三)といふ一節を繰り上げて冒頭の一節に接続せしめ、觀兵式当日の太后充の怪文書的一件・王の失踪等の記事を、その後に移すといつた改作を施してゐる。その為、屈折した探偵小説的味はひは薄れ、平凡な実録風の読み物に墮してしまつたことは、否定出来ない。

7) 拙稿「晩清に於ける虚無党小説」(『天理大学学報』第八五輯)。

「馮腦印」以下七篇は、湯友誠氏によつて、新しく指摘されたものである。<sup>8)</sup> 訳者は明示されてゐないが、羅普と推測して誤りあるまい。蓋し、ここに訳出された七篇は、既訳の作品を注意深く省いてゐる。殊に、『新民叢報』に訳載された「百合花」の如きは、雜俎欄に「海外奇譚」として掲げられた二篇中の一編で、編輯の内幕に通じてゐた者でなければ、氣附く筈はない。又、この時期に、羅普は康有為の密命を受けて上海に赴き、狄楚青・梁啓超と共に『時報』創辦のことを議し、やがてその総主筆となつて、同地に居住することとなる。<sup>9)</sup> 彼を措いては、他に考へられないからである。因みに、梁はこの年（光緒三十年）一月香港で開かれた保皇会大会に出席、二月下旬日本へ戻る途中上海に潜入、日本名吉田晋（吉田は吉田松蔭にあやかるものである）を名乗つて、虹口の日本旅館「虎廬家」に投じたもので、その行動自体が甚だスリルに満ちたものであつた。

「百合花」以下の数篇については、旧稿に訳列を引いて説いたことがあるし、上にも引いたから、今は略して簡に從ひ、「馮腦印」の冒頭の一節を参考までに挙げて置く。

#### 外交小説

本書原名歐洲朝廷之秘密。蒐述奇聞，都十余則，係刺取當時實事，而潤色点竄之者，虛耶實耶，読者作小説觀可也。訳文間有増損，期鑒閱者之目而已。

#### 馮腦印

羅馬教皇披士第九在位時，予 借用著者口氣，  
其實假託也 為法國公使，駐節此邦，蒙教皇倚信甚篤，意殊自得。惟引以為難者，身居羅馬，而與義大利朝廷諸人，不能不斷絕往來耳。蓋教皇與義政府，冰炭不容，已非一日。嘗憶曩年，葡萄牙王行幸羅馬，欲見教皇，則慮失歡於義王，欲訪義王，則又得罪於教皇，卒兩不拜謁而去。凡通曉羅馬情形者，當已認知此事矣。雖然，予不能公然

- 8) 湯友誠「晚晴の翻譯小説——中島利郎編『華訳日文小説編年目録』補遺」(『啞』第12号)  
9) 楊家駱主編『梁任公先生年譜長編初稿』卷十三，光緒三十年の条。包天笑『鈞影樓回憶錄』の「新聞記者開場」・「時報懷日記」の項その他。

出入義廷，而廷臣中亦有与訂私交者，如費斯迦羅伯爵，即其一也。伯爵性情誠摯，聞見胥博，系出名閥，家亦多財。惟不知何故，頗不孚衆望。予固外人，未由知其委曲。惟聞其歲受恩俸於政府，故疑其召誘之由，即在於此。此外絕無可指摘者。且伯爵夫人，美而知礼，待予頗殷勤。故予常過從其家，未嘗薄視之也。伯爵与予皆有嗜古癖，見玉石碑印之類，輒相与評賞為樂。大抵義大利貴族，皆好古玩，与我法人之好女伶，英人之好拳法好蓄犬，殆不相下。范的康宮中，有一博物院，搜藏古貨至夥，入其中者，但覺光彩奪人，目不暇給。予幸奉使此都，覓有余暇，輒縱遊其間，以飽眼福。惟每赴博物院，途遇伯爵，邀之偕往，皆假故見卻，予以嗜好如彼，獨不肯一赴博物院。

かうした外交小説乃至は國際スパイ小説が、彼に於てどの程度歓迎されたかにはやや疑問があるけれども、やがて既述するオープンハイムヤル・キューの紹介に連り、清末・民初の頃に一寸したブームを捲き起す。それについては、尚後に少しく触れよう。

#### (ロ) 涙香物の重訳

ところで、明治の探偵小説と言へば、まづ黒岩涙香に止めを刺す。新聞人としての存在も、蘇峰に比肩して劣るものではない。かくて、涙香物の華訳は、探偵小説以外の著作をも含めるとなると、凡そ二十種ほどになる。その嚆矢をなすのは、

(華訳名)	(原作者名)	(華訳者)	(掲載誌)	(刊年)
離魂病	佚名	披髮生	『新小説』 <small>自第一号至第六号</small>	自光緒廿八(1902)年十月十八日 至同廿九年六月十五日

(黒岩涙香『探偵』[創作])

で、完訳後間もなく単行上梓された。阿英氏の書目に、「光緒二十九年(1903)広智書局刊」とあり、顧燮光の『小説経眼録』には、別に「文明書局本一冊」のあることを伝へ、併せて

披髮生訳述。本書所演奇案，乃美国事实，年月無考，約二十年前事也。所記乃美之奧利安州厚利銀行失銀一事。中如阿松之貞，雁英之義，院長之酷虐，貞二福太阿桃之陰險，余金藏之病，縷晰言之，一洗翳障。惟訳筆間



有冗複，然演義体固宜爾也。

とその概評を記す。以上の他，単行本ではないが、『新小説彙編』巻二にもこれを収める。

『離魂病』は，華訳された最初の長篇探偵小説であつた。その原作者及び原作について，上記の資料には何も明示してゐないが，黒岩涙香の『探偵』である。伊藤秀雄氏の研究に拠れば，この小説は，もと明治二十三年（1890）春頃の『都新聞』に掲載され，同年七月扶桑堂から単行上梓された『涙香集』に収められたもので，涙香得意の翻案物ではなく，創作であるといふ。<sup>10</sup>『涙香集』に収める他の諸篇には「涙香小史集」と署されてゐるのに対し，本篇には「涙香小史著作」とあること，及び本篇と小品「広告」（『絵入自由新聞』掲載）とを抜いて別冊とし，『探偵』と題するものが同時に出版されてゐるから，創作たることはまづ疑ひない。もつとも，この時分，涙香は未だ十分創作に習熟して居らず，面白い材料を扱ひながら幾分か持てあまし気味で，途中から嫌気がさしたか描写が粗雑となり，結末を急いだらしく，傑作とは評し難い。而して，華訳に『離魂病』と題するのは，小説中の重要人物中井銀行の頭取中井金蔵が離魂病（夢遊病）の持主で，黒田真一から預つた五万円を，夜中手提金庫から地下室の壁穴に移したのを全く意識せず，大金紛失と狼狽したことが，事件の発端になつてゐるからである。記者披髮生を『東欧女豪傑』の作者（嶺南羽衣女士）に擬するとすると，彼は同時に創作・翻訳小説の筆を執つてゐたことになる。しかも一方で，「政党論」（『新民叢報』自第廿五号一至第廿七号。自光緒廿九年一月至同年二月）といつた真面目な論文も書いてゐるのだから，大変な精進ぶりだ。訳文は，

這時恰可獄卒進來報會面時限滿了。阿桃便悻悻然不顧而去。小谷見阿桃去了，正在呆立妄想。忽見那屋裏的黑処，走出一個人來，拉着小谷手說，妙哉妙哉。我懂得了。小谷驚定一看，原是包探這件案情的賽孫。只見賽孫再向小谷說，我即前去尾着阿桃，晚上纔得歸來，你坐等消息罷。說者，大踏

10) 伊藤秀雄『黒岩涙香・その小説のすべて』（桃源社刊。昭和四六年）。因みに，本稿に於ては，氏の研究に負ふところが多い。新聞初出の時期は，その儘氏の調査に従つた。

歩出了獄門，見前面有一女子，急足而行。認得正是阿桃。於是遙遙跟着，如影隨形，左灣右轉，無何到了余宅門口，只見阿桃左右望了幾眼。正欲入門去，賽孫突如電光一閃，早閃身走近阿松身邊，附耳語道，你想帶着小谷自獄中逃走嗎。真算大胆的了不得。阿桃聞說，變了面色，回頭一顧，見賽孫正在自己身後，急伸手在衣袋拿出一扇短鎗，向着賽孫一閃。可憐賽孫噠啵一聲，便倒在地下，脉也停了，氣也絕了。

といった調子のもので、まづまづ原文通りであるが、時に

這個疑團，不讀到這本小説結尾那一葉，終是不解約。訳者屢想把那黑幕，預先開了，免得看官著急，總恐犯了小説的体例，只得忍著不説。

といった饒舌を混へてゐる。『小説経眼録』の著者が、「惟訳筆間有冗複，然演義体固宜爾也」と言つてゐるのは、半ばはもたつた涙香の原文の責任でもあるが、半ばはこの種の饒舌の挿入を指すものと見てよい。序でを以て言へば、同じ著者が、「本書所演奇案，美国事实，年月無考，約二十年前事也」と言つてゐるのは、華訳の冒頭を引くもので、御愛嬌であるが、裏を返すと、未だ「探偵小説」に目馴れぬ時人の小説観を窺はせるもので、決して一笑に附し去るべきではない。

今一つ。華訳では、中井銀行が厚利銀行。頭取の中井金蔵が余金蔵，その長男金太郎が福太，娘の桃子が李阿桃，会計長の小谷常吉が范小谷，船乗りの黒田真一が田真一，探偵の水嶋浮が賽孫といふ様に、改められてゐることである。勿論，涙香流の翻案態度を模したものであることは贅するまでもないが，海外文学に馴染みの薄い読者に対しては，採られてよい手法の一つであらう。後出の翻訳作品中にも，その顰に仿ふものが多かつたことは，既に見來つたところである。

『離魂病』に続いて，翌光緒二十九年（1903）には，

（華訳名）	（原作者）	（華訳者）	（掲載誌）	（刊年）
美人手	法国某	香葉閣鳳仙女史	『新民叢報』 自第卅六号一 至第八十五号	自光緒廿九年六月廿九日 至同卅二年七月一日

（黒岩涙香訳『美人の手』，改題して『片手美人』。原作は du Boisgobey :  
“*La Main Froide.*” 1889)

があるが、これについては別稿で詳説したことがあるから、今は再説しない。<sup>11)</sup>ただ、原作についてであるが、“*La Main Froide.*” [1889] (『冷たき手』) の英訳 “*The Cold Hand.*” とする木村毅・柳田泉説と、“*La Main Coupée.*” [1880] (『斬られた手』) の英訳 “*The Severed Hand.*” とする田中潤司説とがあつて、今の私にはその何れとも決し難い。実は、旧稿では田中説に従ひ “*La Main Coupée.*” としてゐるのだが、それは “*La Main Froide.*” だとすると、1889年は即ち明治二十二年で、その年の五月から涙香訳が『絵入自由新聞』に連載されるのだから、同年上半期のうちに原作から英訳、英訳から涙香訳と転訳されたことになり、時間的にも無理な様に考へられたからである。しかし、涙香は、デュ・ボアゴベイが余程好きであつたらしく、時としては驚く程早く翻案してゐるものがある。例へば、明治二十二年 (1889) 十一月四日金桜堂・今古堂から上梓された『指環』 (“*L’Oeil du Chat.*”) は、前年中の『都新聞』に連載されたものと目されてゐるが、H. L. Williams の英訳 “*The Cat’s-eye Ring.*” が G. Routledge & Sons 社及び Guildford 社から上梓されたのは1888年のことである。<sup>12)</sup> とすると、如上の疑問は一応解消することになる。又、「英訳が “*The Cold Hand.*” (義手) というので、これは明確うたがいがよいがない」(筑摩版『明治文学全集』47『黒岩涙香集』解題、三九四頁) と言ふ木村毅氏の発言は甚だ確信に満ちたもので、田中説を念頭に置いての発言とも受け取られる。涙香の蔵書は、その歿後、白石実三氏の許に保管されてゐたが、大正の末期頃市場に出、かなりの量が木村毅氏の架に帰した (その一部は、後に江戸川乱歩氏などに贈られたといふ)。氏の発言は、さうした資料を踏まへての発言であり、柳田泉氏もこれを認めてゐるとすると、暫くこれに従ふのが

11) 拙稿、前掲「晩清に於ける虚無党小説」。尚、田中潤司氏「海外探偵小説総目録」のデュ・ボアゴベイの項には、江戸川乱歩氏の追記がある。

12) 因みに、“*The Cat’s-eye Ring.*” には、ヴィゼトリー社 *Vizetelly & Co.* から出た “*Sensational Novels.*” に収める廉価本があり、涙香はこれに拠つた可能性があるが、手許のノートには刊年を記しそびれてゐる。又、田中氏の「海外探偵小説総目録」に “*Le Plongeur.*” (1889) (潜水夫) 英訳 “*Nameless Man.*” 海底の重罪 (涙香) 明治22” とするは誤。“*Nameless Man.*” の原題名は “*L’Homme sans Nom.*” 1872 である。『海底の重罪』は、明治廿二年一月三日から『都新聞』に掲載されたものと推定されるから、“*Le Plongeur.*” では原作より涙香訳が早く出たことにもなる。

穩当の様である。後考に俟つ。

『美人手』と並んで、この年には、又、

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
奪嫡奇冤・二冊	[佚名]	商務・編訳所	商務	光緒二十九年 (1903)

があるのが注目される。『説部叢書』所収の本は、紙型印刷による後刷本で、一冊に合綴されてゐるが、原本は二冊であつた跡を示す。巻首に、光緒二十九年孟冬彼岸居士の序があり、訳者も商務印書館編訳所となつてゐるが、何人か定かではない。

本書にも、涙香物の重訳たる明示はないが、黒岩涙香の『人耶鬼耶』の重訳であることは明白である。言ふまでもなく、原書はガポリオーの『寡婦ルルーシュ事件』で、涙香はその英訳によつてゐる。ジョン・カーター (John Carter) の記すところによると、ガポリオーの小説の初版本は、今日では到底入手し難い稀本に属し、英訳は、フレッド・ウィリアムズ及びジョージ・アーネスト共訳の “*The Widow Lerouge.*”, tr. by Fred Williams & George A. Q. Ernest (James R. Osgood & Co., Boston 1873) が、最も古いといふ。イギリスでは、アメリカより十二年も遅れて、1885年ロンドンのラウトリッジ社 (G. Routledge & Sons Co.) から上梓されてゐる<sup>13)</sup> が、涙香が何れに拠つたかは詳らかでない。恐らくは、後者であつたらうけれども。

さて、涙香訳『人耶鬼耶』は、当初『今日新聞』(明治三十 [1887] 年十二月十四日以降) に掲げられ、翌年十二月四日小説館から単行上梓された。単行上梓されたのは、同じ新聞に一足先に掲げられた『法庭の美人』(明治二十年十月) よりも早いから、処女出版と言つても差支へない。而して、涙香が本書を訳出するに至つた動機なり目的なりについては、自ら緒言に記すところがある。

予今回訳述する「人耶鬼耶」と題せる此一篇ハ仏國にて古来其例なき大疑



13) John Carter: *Detective Story Catalogue*, Scribners.; Ibid: "Detective Fiction." (in "New Paths in Book Collecting.") p. 40.

獄の顛末なり、大疑獄とハ其の事件の大なるには非らずして其事柄の疑はしく罪人の判じ難きを云ふなり。余が此篇を訳述するハ世の探偵に従事するものをして其職の難きを知らしめ又た世の裁判官たるものをして判決の苟しくもすべからざるを悟らしめんが為なり。之を切言すれば、一ハ人權の貴きを示し一ハ法律の軽々しく用ゆべからざるを示さんと欲するなり。

華訳者の意図も、亦同様であつた事は彼岸居士の序に徴しても明らかであるし、読者も亦さうした受け取り方をしてゐたことは、觚菴の『觚菴漫筆』に偵探小説、余甚佩『奪嫡奇冤』一書、即一名『枯寡婦奇案』者、不僅案之反覆曲折処見長、即搭司官之裁判時、其審度寬嚴、折衷至當、實足令人五体投地、且有裨於臨機斷事処不淺。

として、タバレー爺さんから、犯人は皇族で侯爵たるコモリン・レトーの長男伯爵コモリン・アルバートであることを知らされた判事のダブロンが、如何すべきか去就に迷ふ一節（第十二章）を引用してゐる事によつても、明らかである。訳例は、右の文例だけでも十分であらうが、煩を厭はずに卷末の一節を挙げて置く。蓋し、華訳が涙香訳に基くものである事を明示してゐるからである。

正欲向楼下衆捕役等有所言、突有鎗声二響、発自楼上理野亜房中。奇藍古辣聞之、知彼等已自尽、不覺欣然、衝口自語曰、好好、彼等之事畢矣。於時捕役諸人、亦一擁上楼、随同奇藍古辣急往理野亜房中視之。其情形實為可慘。当見沙參儒与理野亜並坐一長椅之上。各以手鎗擊其咽喉、洞穿而死。其傍置有遺書二通。即沙參儒瀕死之所親写。其書一以貽奇藍古辣、一以貽搭司官者。奇藍古辣当即遣人急召医生驗視。迨医生驗視訖、則二人之死殊絕、已無可如何。奇藍古辣乃令捕役將二人屍骸守護、随自將沙參儒遺書、收藏衣袋、立往公堂見搭司官。見時、即將沙參儒貽搭司官之遺書一通取出、交与搭司官、書中所言、乃沙參儒自陳其刺死枯羅甸之事之始末、詳晰具備、与奇藍古辣前此所查得者無異、並請司官速即將爾卑爾德省積等語。搭司官乃立將爾卑爾德積放、而爾卑爾德從此乃始得逍遙自在。復其青天白日自由之身。至沙參儒与理野亜之屍骸。則由奇藍古辣庫摩靈理野墮及沙參儒夫人之弟某三人昇去、如法營葬。葬畢、奇藍古辣歸。乃始將沙參儒所与之遺書取出細

閱，其文録下。

世間最易致誤之事，殆無如公堂之判案者。且雖已致誤，而初不自知，至於無罪之人而処之以死刑者，亦復不少。彼人既被処死刑。既死之後，無口申訴，其誤終無由而知，即使或知之，而断者不可復統，死者不可復生。終無由以償其命。吾知足下固見義勇為之人。伏望速籌建設一協會，使万国廢除死刑，足下誠与吾有同心者，則吾頃者向理野隨索得銀二万円，現其銀尚藏於吾之牀下，吾甚願將此銀交出，以捐助此会，為創辦費之一分，此事如能有成，則吾与理野雖死之日，猶生之年，幸甚幸甚。（第四十四章）

原作の巻末部では、サーデーノールの自決後、その愛人チリエーは八万法の所有者となり、幸福な生活を送ることとなつてゐる。これを改作して二人とも自決するといふ様にしてしまつたのは、涙香の東洋的な処世観からであらう。<sup>14)</sup>従つて、例示する遺書の条りや死刑廃止協会の事などは勿論原作にはない。『奪嫡奇冤』が涙香訳の重訳たることを明示すると同時に、死刑廃止といふ極めて近代的な刑法観が、いちはやく中国に紹介されてゐる点から言つても、興味深い資料なのである。

それはともかく、『奪嫡奇冤』は、かなり好評であつたらしい。侗生の『小説叢話』にも、『福爾摩斯偵探案』や『降妖記』と並べて賞揚してゐることは、既述の如くである。

翌光緒三十年（1904）には、

（華訳名）	（原作者）	（華訳者）	（発行所）	（刊 年）
三 纓 髮	涙香女史	陳冷血	時中書局	光緒三十年 (1904)

（未見。陳冷血訳『偵探譚』第三冊）

がある。未見のものではあるが、涙香の『<sup>探偵小説</sup>三筋の髮』であることは、『偵探譚』中に尚数篇日本の小説が収められてゐることから推しても、想像に難くない。これ亦涙香の創作で、当初『無慘』と題して出版（明治二十三年二月，上田屋書店刊）されたが、明治二十六年（1898）十月，上記の如く改題して再版された。この時分，訳者と涙香ファンであつた羅普とは未だ交渉がなかつたの

14) 伊藤秀雄氏，前掲書，二十三頁参照。

であらうか、涙香を女流と誤認してゐることには苦笑させられるが、これを選んだ炯眼は讚へられてよい。蓋し、この小説は、筋の面白さといふよりも、事件の推理解剖を中心とした純粋な探偵小説で、しかも創作されたのが、ドイルがホームズ物に手を染めるより三年も早い作品だからである。<sup>15)</sup>

訳者陳冷血とは、後に『時報』・『申報』の主筆・総編輯などの要職を歴任した「報館佬」陳景韓（1878—1965）のこと。江蘇省松江県の男で、早歳湖北武備学堂に学び、やがて日本に留学した。『時報』時代——時に総経理は狄楚青、総主筆は羅普であつた——同僚であつた包天笑は、当時のことを追想して、

陳景韓（筆名冷血）也在時報上写小説的。他写的小説，簡潔雋冷，令人意遠，雖然也有許多訳自日文的，但訳筆非常明暢，為讀者所歡迎。那時候，正是上海漸漸盛行小説的当兒，讀者頗能知所選擇，小説与報紙的銷路大有關係，往往一種情節曲折，文筆優美的小説，可以抓住了報紙的讀者。楚青的意思，要我与冷血的小説，輪流登載（那時的報紙，每日只登一種小説），以饜讀者之望。

と記してゐるが、<sup>16)</sup> 景寒・華生・冷血・冷・不冷・新中国之廢物などの筆名を使つて書かれた小説は、当代に人気のある読物だつた。しかも彼は、単なる一介の流行作家ではなかつた。包天笑は、又、「景韓的文章，簡潔老辣，即写時評，小説亦然」とも記してゐるが、その政治評論・社説は、寸鉄にしてよく人の肺腑を抉るものであつた。それが、如何に青年達を魅了したかは、戈公振の『中国報学史』に引く胡適の「十七年的回顧」（同書 144頁～147頁）に詳しいが、ここでは、寧遠の要を得た回憶文の一節を引いて置く。<sup>17)</sup>

他写的社論見解精闢，筆錄犀利，在當時（大約在一九〇五年至一九二〇年之間）上海報界中，公推第一，拋說有不少定閱申報的人，就是專門為了要讀冷血先生写的社論。

15) 柳田泉「隨筆探偵小説史稿・四，涙香の創作小説『無慘』について。」（『続隨筆明治文学』所収）

16) 包天笑「新聞記者開場」（『鈞影樓回憶錄』）。尚、包氏の『回憶錄』中には、隨所に陳景韓のことが見える。

17) 寧遠「回憶陳冷血先生」（『小説新話』）

光緒三十一年（1905）に入ると、探偵小説流行の波に乗つて、涙香物の紹介も急激にその数を増す。以下、任意にこれを拾ふと、まづ第一に

（華 訳 名）	（原作者）	（華 訳 者）	（発行所）	（刊 年）
懺情記 二冊	（佚 名）	商務・編訳所	商 務	光緒三十一年四月 (1905)

（黒岩涙香訳『妾の罪』の重訳。原作未詳）

がある。初め単行本として上梓され、後に商務版『説部叢書』第二集第八編（初集本第十八編）に収められた。角書して「言情小説」とするのは、涙香訳が一人称で語る一女性の懺悔といふ形を採つてゐるからであらう。純粹の探偵小説ではないが、一種の裁判小説で、犯罪が絡つてゐる小説だから、此処に加へて置いてよい。涙香訳は、当初六十二回に亙つて『都新聞』に連載され、明治二十三年（1890）九月大川屋から単行上梓された。原作は、アメリカ物といふだけで、詳らかではない。蓋し、涙香の翻案は、普通に考へられる以上に自由な翻案なので、例へば『法庭の美人』（Hugh Conway: “*The Dark Days.*”）の前文に記すが如く、「一たび讀みて胸中に記憶する処に従ひ自由に筆を執り、自由に文字を駢べ……（中略）……稿を起してより之を終るまで一たびも原書を窺は（ず）、…原書を書斎に遺し置きて筆を新聞社の編輯局にして執」るといふ極端なものすらあつた。現に、『妾の罪』にしても、後半部は、『法庭の美人』の改作めいた個所がある位であるから、原作の追求は容易ではない。

閑話休題。華訳文は比較的忠実な訳文で、誤訳も少ないのは、同書館内に、長尾雨山の様な錚錚たる人材が顧問として在つたからであらうか。例文として、旅商人に身をやつした古山とハナとが、スペインに入国すべく乗つた列車の中で、村上の幻影に怯えて下車し、宿をとつた条りを示して置く。

那時我正在呆想。陡然当著我的旁边，聽見悽悽切切的声音，好似哭泣又似怨恨。我回過頭去一看。原来，不是別的，乃是和我睡在一牀。福雷曼夢囈的声音。福雷曼難道也做什麼夢麼。難道夢裏也看見了什麼嗎。看官。當著夜深人靜，世界上万籟蕭森，草木都眠著，一些声息也没有的時候，忽然聽見夢魔囈語之声。該是害怕不害怕，況且我的枕旁，還有泥水穆郎亡故的面貌，滿眼含著怨恨，在那裏瞪我呢。啊，我知道了，穆郎的亡魂，見我今天晚間和福雷曼，同牀共睡，起了悔恨之心。因此現出來警戒我麼，無奈這



家客寓，房屋甚少，以外再沒有可以另住的地方，這便如何是好呢。穆郎啊，你如果有靈，總該知道這個。可憐我是萬不得已。我禱罷，要想起坐牀來。誰知再也不能動彈。只得暫時閉眼，凝一會神。忽然心裏一清，暗想那壁上影子。莫是擺在牀前玻璃蘭泊燈土蔥花罩子燈外面五色罩子形如蔥花一般的影子麼。那罩子上頭四面一圈一圈的突起，猶如水波紋，每一個水波紋下面，刻画著很濃厚的花紋，映在壁上，宛然似一個有頭的人，立在那裏一樣。啊，原來穆郎的面貌，就是這個東西，我真是又昏又鈍。我把蘭泊燈移開些到別處去。影子自然沒有了。想得端正，就在牀上伸手去拿，剛剛把燈柱握定。啊，看官呵，那碗燈從旁晚時點起，直到此時，時候過久，燈檯已燒灼得猶如湯火一般熱。我陡被他一燙，叫一聲哎唷，手指一鬆，那燈望空拋下。睡在外邊的福雷曼，睡得已如死人。蘭泊燈正跌磕在他身上，燈檯裏剩下的煤油，從他頭上澆滿了一身，火一見了煤油，立刻燃個正著，轟轟烈烈燒了起來。福雷曼驚醒突起，雖則飛也似跳下牀去，無奈身上到處煤油，萬萬不能消滅，越是亂抖亂撲。那火燒得越熾，福雷曼的身體，猶如火樹火棍一般，滿屋子裏火光，幾乎旁邊四下裏，都著了火。只聽見火人裏面，透出了說話聲音，道快些幫救我呀，無奈我要想救，也不能救，惟有手脚忙亂，咳嗽嘔噓，喊也喊不出來。 （第十回 旅邸迴燈假夫斃命 捕房託足看役談奇）

この訳でも亦白話が用ゐられてゐるのが、注目される。又、當時の新聞や雑誌に掲げられた本書の広告の中に、「此書可反觀吾国聴訟法之不善，而亟宜大加改良。故名曰裁判小説」とあるのも、当代に於ける中国人の受取り方を示すものとして、興味深い。全体としては、良質の部に属するもので、顯變光が、「訳者仿章回体出之，写情頗覺栩栩」（『小説経眼録』）と評してゐるのも背ける。とまれ、かうした小説の紹介が、従来「比事物」に終始した中国の案件小説にどの様な影響を与へたかは、今後に残された課題の一つであるに違ひない。

『懺情記』に一足遅れて、上記の

（華訳名）	（原作者）	（華訳者）	（発行所）	（刊年）
指環党	〔佚名〕	商務・編訳所	商務	光緒三十一年十月 (1905)

が上梓されてゐる。これ亦、単行上梓された後、商務版『説部叢書』第三集第四編（初集第二十四編）に取められたものか。もつとも、同叢書は光緒三十二

年春から刊行を開始し、それと同時に三十点ほどのものが発売されたらしい。とすると、当初から『説部叢書』に組込まれたもので、それが初出本であるかも知れない。その辺、上記『懺情記』とは幾分性格を異にするか。<sup>18)</sup> 本書にも、原著者の名も、原訳者の名も明示されてゐないが、黒岩涙香訳『指環』（明治二十二〔1889〕年十一月、金桜堂・今古堂刊）であることは、明らかである。原作は、デュ・ポアゴベイの『猫眼石の指環』で、涙香訳はウィリアムズ（H. L. Williams）の手になる英訳“*Cat's-eye Ring.*” 1888 に拠るものと一応見て置かう。英訳の出た翌年に涙香訳が上梓されてゐることは注目してよい。この華訳でも、牧野采蘭を謝小野、黒瀨柳心を柳子貞、手花贅庵を花贅庵と改めてゐるが、蓋し、既述『離魂病』のそれに仿ふものであらうか。以下、少しく訳文の一節を覗いてみよう。漏具街<sup>ミカド</sup>の死体縦覧所の一説である。



不一時、已至存仁巷屍骸縦覧所、見人擁擠異常。蓋屏西村事既登新聞、巴里街談巷議、無不詫為奇案、因此來觀者每日不下數千人。少野側身入内、見内陳屍骸甚夥、見溺死者服毒死者自縊者皆陳其中、各標木標誌其死之年日。再進、見左旁新陳死骸一具、即前屏西村縊殺之少年也。少野目不他顧、直至死骸前仔細觀察。見少年顴額切齒、麻絙猶隱隱纏項上、熟睇之似曾與相識。又見其雙目爍爍視己、似欲自訴其冤而求為報仇者。少野正傷感間、忽覺電光一閃、有一物直触少野之目、則一光耀射人之貓眼石小指環也。此指環製法大小、恰如伯爵夫人所嵌者無絲毫之異。少野大驚、自計曰、此少年何故與夫人嵌同様之指環、且貓睛正復成對、又軼念此少年豈與夫人故有瓜葛乎。或偶然相同乎、是真不可思議之事、左思右想、不能解此問題。

更に、次の訳例を見よ。

因緩歩行數里、至銀行、甫欲入門、見一四十許肥胖紳士、自銀行事務所出、正是伯爵夫人所夜會時所見花贅庵。少野佯作未見。贅庵既出、忽又一少年

18) 拙稿「商務版『説部叢書』について」（『野草』27）参照。

自内出、乃子貞也。子貞垂頭喪氣、蹣跚而前、若有所思。少野迎面呼曰、子貞君、癡癡何所思、子貞陡一驚拳首曰少野君=僕=君=少野笑曰、君真迷醉乎勿憂=事当諧子貞知其意、謂与伯爵夫人結婚事、急答曰否。=否。=勿戲言僕=僕=言至此又止。少問又曰君。=君。=言至此又止。少野益疑、曰。君何故抑鬱不樂。子貞曰僕。=僕=不幸。少野急問何事不幸。子貞曰免職。=免職=少野聞免職二字、不禁笑曰、免職固何傷、大丈夫磊落、何處不可容身、使無此銀行。君能不啖麵包乎。子貞曰否。=否=不但免職而已、若但免職自無傷耳、僕今受无妄辱矣。……

黒瀬柳心が手花贅庵の出入する銀行の頭取森村渋藏から、鍵を預けたら三万円が紛失したと、難題をふきかけられて免職となつた一段である。ここで、切迫つまつた会話のやりとりを示すのに、行を改める事などせず、=乃至は=とといった符号を用ゐてゐるのが面白い。勿論この様な方法は成功せず、爾後も殆んどその例を見ない。尚、この訳文には、伯爵・倶楽部・公園・銀行・夜会など、日本製の訳語が、しきりに用ゐられてゐる。「盲人瞎馬之新名詞」と騒がれた日本語（和製漢語・和製訳語）の流入を反映するものである。

同じ光緒三十一年に訳出された

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
決闘会	(佚名)	小造	『新新小説』	光緒三十一年 (1905)

(未完。黒岩涙香訳『決闘の果』の重訳)

秘密囊	(佚名)	小造訳	同上	同上
-----	------	-----	----	----

(未完。黒岩涙香訳『武士道』一名『秘密袋』の重訳)

については、未だ涙香訳との比照を試みてゐない。『決闘の果』の華訳には、他に同文滬報館訳『決闘縁』四十回(刊年未詳)がある。これは回数も涙香訳と一致するので、先づ忠実な訳と目されるが、未だ披見する機会がない。因みに、『同文滬報』は、東亜同文会が『字林滬報』を買収して継続刊行した日系の漢字日刊紙である。

涙香訳『玉手箱』が華訳されたのも、この年である。

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
巴黎繁華記	(佚名)	商務・編訳所	商務	光緒三十一年十月 (1905)

『玉手箱』を移して『巴黎繁華記』と題するのは、涙香訳の凡例に、「原書ハ小説に兼て巴里繁昌記とも云ふべく、貴賤男女金の為に忙はしき其有様を穿ちたる者」とあるに拠る。その原作について、柳田泉先生は、「原本ポアゴベイ『閉ぢられし扉』といふ」とのみ記して、英訳名を示されなかつたが、何時の間にか“*The Closed Door.*”とされ、これが通説となつてしまつた。これは何に拠つたのか。按ずるに、“*Porte close.*” (2 tom., Paris. 1885) であるならば、涙香が拠つたのは H. L. Williams 訳“*The Condemned Door.*” (G. Routledge & Sons, London. 1887) ではなからうか。英訳を披見し得ぬ儘に確認を怠つてゐるが、『指環』や『此曲物』(後改題『塔上の犯罪』)など同じ人の訳に拠つてゐること明白であるから、さう思へてならない。英訳には、共に‘*Authorised copyright translation.*’といふ注記がある。

この小説は、もとより純粋な探偵小説ではない。一種の風俗小説と言ふべき作品であることは、涙香の凡例にも記すところ、華訳も亦「社会小説」と角書してこれを扱つてゐる。しかし、玉手箱の秘密をめぐつて、謎の多い松村男爵夫人の行動は、読者に探偵小説的興味を懐かせずには措かないし、夫人の弱味に付け込む明日原男爵の強請、夫人と明日原との間に生れた盲目の娘の殺害といつた犯罪も語られるのであるから、ここに加へて置いてよい。例文として、夫人が娘の屍体を直視する一節を抽いて置く。

### 第三十九回 見屍身夫人驚絶命 挟槍銃總理大尋仇

話說麥夫人瞧見箱子裏物件，驚得目瞪口呆，言動不得。你道是什麼。原來是這幾時費尽心血尋了又尋，再也求之不得。麥夫人親生瞎眼愛女的屍骸。這屍骸不是早晚死的，乃在七箇禮拜以前死了，裝入箱子，寄存銀行庫箱之中。只因時在寒冬，氣候嚴冷，所以還沒腐爛淨盡。但兩片嘴唇，已經不見，露出一寸來長的牙齒，頭見死的時候，心裏不甘，緊咬着牙關，切齒痛恨。那雙瞎眼，早已爛得空空，只見兩箇黑洞窟窿，還像怨恨無情的父母，瞎眼看着麥夫人一般。頭髮已經沒有，處處有禿落之痕，兩頰陷落，兩額突出。凡人對着這副形容，任是鐵石心腸，也要悲傷憐惜。何況麥夫人是親生之女，多年想望着不得一見，到了今日纔得遇見，只落得這樣情形，何消說得。當時幾乎人事不知，只落得肚子裏陣陣悲酸，夾着驚怕，那淚滴溜漣漣

猶如泉湧。好半天，五臟經裏，比刀割針刺還要難堪，叫声哎喲，回身逃出廊下，直到樓梯那邊，身上沒了力，陡然跌倒在地，暈絕過去。可憐麥夫人莫是追趕他苦命瞎眼女兒同上黃泉麼。這且擱下慢表。

この華訳でも、松村男爵は麦慕倫，その妻は麦夫人，悪漢明日原は夏士華，遠森は都慕黎字して雪南，丸島は馬希孟字は坎岡といふ様に翻案してゐるが，訳そのものは涙香訳に忠実で，よく訳してゐる。

因みに，デュ・ボアゴベイのこの小説には、『忍び夫』と題する水田南陽の別訳があつて，明治二十五年十二月扶桑堂から上梓されてゐることを，附言して置く。

この年には，又

(華 訳 名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊 年)
法國著名偵探談 之雙金球・二冊	(法・佚名)	祥文社	清国留學生 生會館	光緒卅一年四月 (1905)

(黒岩涙香訳『大金塊』の重訳)

がある。これ亦未見の訳であるが，寅半生(鐘駿文)の『小説間評』巻二に，「法国小説。日本黒岩涙香原訳」と注して，次の一文を掲げてゐるから，『大金塊』(明治二十六〔1893〕年二月，扶桑堂刊)の重訳であることは間違ひない。

是書凡四十回。敘英国貴族竹田男爵家藏金兩球，重九百四十斤。年老無子，作一遺言書，託青山老人作公証人。竹田有女甥二，一柳娘，法人，一桜娘，英人。竹田喜桜娘而不喜柳娘，視如奴婢。又有一忠實黑奴，名片助，甚勤謹。一日疾篤，遺言以金球一与桜娘，未及簽名而卒。於是青山老人開發遺言書，由荒川医士作証，書中備述幼年曾与法国貧女清水娘結婚，生一子清水岩夫，一切家産及金球，均与岩夫承受，並留十萬元作尋訪之費，有照片作証。柳娘一見甚喜，謂此即伊未婚夫，衆皆驚異。突来一少年自称清水岩夫，与照片相合，除片助外無人能識，而片助已於前夜被人刺死，兩金球亦失去。衆論譁然，乃嘱岩夫回国取証拋，一面報警察請偵探探案。偵探乃疑公証人因謀産起見，特雇人将片助刺死，另覓假岩夫承受家産。荒川医士信之，私偵公証人，果覺形迹可疑。適岩夫為人刺死，另来一人，自称真岩夫，攜有証拋，遂羣疑公証人所為，共入警署。後查得前岩夫係假冒，皆柳娘所為。柳娘者，亦非真柳娘，案破逸去。公証人遂得白其冤，真岩夫乃与

桜娘結婚。金球亦並未竊去，片助恐為人盜，藏入男爵棺内，失而復得。岩夫遵男爵遺言，仍分一金球与桜娘云。既曰公証人，必為男爵素所信服者，何人不可疑，乃竟疑及公証人？殊出情理之外。觀柳娘一切舉動，不及桜娘万万，想竹田早洞悉其奸，故視如奴婢云。

涙香の拠つた原作については、従来フランス物とのみ伝はつて未詳とされてゐたが、卷末に、

余が曾て死美人を訳し初めしとき偶然にも府下に似寄りたる死美人の現はれし事ありしが此大金塊を訳し初むれば又偶然にも之と似寄りたる山田伯爵の五千金紛失事件あり、去れど余の趣向ハ、ジョージ、マンヒル、フェン氏の『暗き家』（ゼ・ダーク、ハウス）とハルリス氏の『身を殺す願ひ』（ゼ・フェータル、リクエスト）を訳したる者なれば勿論掛構ひなし云々とあることが、伊藤秀雄氏によつて指摘され、George Manville Fenn の“*The Dark House.*”と、Harris の“*The Fatal Request.*”二書を訳出折衷した変則的な翻案であることが、今日では明らかとなつてゐる。<sup>19)</sup> Fenn (1831—1909) は、イギリスの少年文学作家として、若干知られた人である。

以上の他この年には、涙香物の重訳として、次の二書が出てゐる。

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)
銀行之賊	美・佚名	謝悛冰訳	小説林社刊

（黒岩涙香訳『魔術の賊』、後改題して『銀行の賊』の重訳。原作は、米国探偵叢話中の一篇『ドナルド・ダイキ』といふ。）

黒 行 星	西蒙紐加武	東海覺我訳	小説林社刊
-------	-------	-------	-------

（黒岩涙香訳『暗黒星』の重訳。原書は、Simon Newcomb：“*The End of the World.*”）

共に、未見の為、多くを語るを得ないが、後者については寅半生の『小説開評』に、

全書叙一黒行星、与太陽衝突、将太陽外殼衝破、其元質使流散地球、焚燒殆尽。此外別無事实、科学家或有意味可尋、非小説家所能索解也。

19) 伊藤秀雄：前掲書、百七十三頁—百七十九頁。

とある様に、探偵小説ではなく科学小説に類すべきものである。もつとも、SF探偵小説が、将来の中国文学に発生した暁には、梁啓超訳『世界末日記』（徳富蘆花訳『世界の末日』の重訳。原作は、Camille Flammarion のものだが、原題名未詳）などと共に、そのはしりとして、脚光を浴びることがあるかも知れないが。因みに、ニューカム（1835—1909）は、ホプキンス大学（Johns Hopkins Univ.）の数学並びに天文学の教授であつた人。涙香が『暗黒星』を『都新聞』に訳載したのは、明治三十七（1904）年五月六日から同二十六日までのことで、偶々同教授の娘マッギー女史が来日したのを歓迎する為であつたといふ。東海覚我（徐念慈）は、『小説林』の主持者、日本語にも通じ、押川春浪の冒険小説など幾つかの作品を訳した人として、我々の耳には親しい。

ところで、光緒三十年（1904）から三十三年（1907）にかけては、商務印書館と小説林社とが、華々しい商戦を展開した時期であつた。樽本照雄氏の調査によると、光緒三十年小説林社から出版された翻訳小説は九点、商務印書館の出版は六点到過ぎないが、光緒三十一年になると形勢は逆転し、小説林社十九点、商務印書館二十一点と、その数に於ても飛躍的に増大する。<sup>20)</sup> かくて、光緒三十二年に入るや、商務印書館は一挙に覇を制すべく『説部叢書』の刊行を開始するが、その巻き返しに小説林社が選んだのが、コナン・ドイル、アーサー・モリスン、ニック・カーターの紹介であつた訣である。

閑話休題。光緒三十二年（1906）に入つて、最初に訳出された涙香物は、上記の『説部叢書』第四集第一編に収める

（華訳名）	（原作者・原訳者）	（華訳者）	（発行所）	（刊 年）
寒 桃 記	日・黒岩涙香(著)	吳禱訳	商 務	光緒卅二年二月 (1906)
（黒岩涙香訳『有罪無罪』の重訳）				

である。原作は、ガポリオーの『首の綱』（É. Gaboriau: “*La Corde au Cou.*” 1873.) で、涙香訳は明治二十一年（1888）九月九日の『絵入自由新聞』第一千六百五十九号の附録として、第四回の途中までが訳載され、ついで同日の本紙から同年十一月二十八日までで連載された後、翌二十二年十一月、魁真楼書店

20) 樽本照雄氏「目録つて何だ」（『大阪経大論集』第124号。）

から刊行された。勿論、涙香が扱つたのは英訳であるが、“*In Peril of his Life.*” (London, Vizetelly & Co. 1882 [2d ed]); “*In Deadly Peril.*” tr. by Sir. G. Campbell, (London, Ward, Lock & Co. 1888); “*Within an Inch of his Life.*” (London, G. Routledge & Sons, 1888) の何れであるかは詳らかでない。もつとも、涙香が扱つたのは、“Sea-side Library”などに収められた廉価版が多かつたと伝えられるし、後者では時間的にも少し窮屈なので、私案としては“*In Peril of his Life.*” (Gaboriau’s sensational novels I)に見当をつけてゐるけれども。

さて涙香訳『有罪無罪』を移して、華訳に『寒桃記』と題するのは、涙香訳の巻末に、

探偵棟日は辭職して林町の別荘に引移り菓物の手入に余念なし。巴里の料理屋にて珍客に供ふる第一等の寒桃へ此別荘より出る者なり。看客若し巴里に到らば忘れずに其桃を味ひ給へと爾云ぬ。

とあるに拠る。訳者呉禱は、商務印書館の編訳所にあつた人であるらしいが、詳しい伝を知らぬ。日本語はかなり出来た様で、良心的な訳を数多く残してゐる。

#### 第一回 克伯爵火裏遭槍 沈巡官村中勘案

話說西歷一千八百七十年，恰當咱們中國同治八年，正是法蘭西國被德意志國兵打敗，節節攻取，直欲打入法京巴黎都城之時。這第二年，當中國同治九年。七月二十二那天晚間十二下鐘，時候恰好夜半，巷柝正打三更，巴黎近處有個市鎮，合鎮人民，都已夢入黑甜，享那睡鄉風味。那時參橫斗轉，萬籟無聲，月淡如煙，夜涼如水。忽有一條街上，風馳電掣一般，駛過來一頭快馬。馬上騎著一個好似農夫模樣的人，儘著放開繮繩，向前飛跑。沿街舖戶家人，有幾個被他驚醒，只聽得馬蹄四足，和成兩聲，撇撇拍拍，跌打著馬路碎石子響。寂靜中帶著凄切聲音，覺得狠為詫異。隨有那好事的披衣起來，推開二三層樓上窗戶，探頭出望，誰知那馬早已駛去小半里遠近。雖則明月當天，那能見他身影，却側著耳朵，還隱隱聽的馬蹄得得的声音。啊呀，料想必是近處那戶人家，出了什麼事故。前往巡察官和中國巡檢司相仿署，呈報案情，看官，你們道這話猜得錯不錯呢。啊。果然，那馬駛到巡檢署前，陡然收繮停了步。農夫颯的跳下馬來，急急掣那大門土門鈴，一面極聲喊道，巡



長沈老爺，快些有事求見。沈老爺……沈老爺。

華訳は，もとより周密体の訳ではない。涙香訳によりながらも，むしろ飾つたところがある。それは，中国古来の文章観のなせる業で，誤訳といふには当らぬ。人物名も，梅姿（ハホイス）・関登（セグノポス）などは，涙香訳そのままのものが用ゐられてゐるが，仙田長永（センデス・チャール）は沈岱土，黒戸伯（クロデッス）はクロ図，富地（トーミジョン）は杜美薫，輕簀（ガルピン）は葛爾貞といふ様に，中国風に改めてあるのは，『離魂病』・『懺情記』などの場合と同様である。

原作は，もともと探偵小説といふより裁判小説と言ふべきもので，涙香訳の場合でも裁判の重要さを社会に警告する意図のあつた事は，中江兆民の序文や涙香の凡例に徴して明らかであるが，同様なことは，華訳の場合にも言ひ得るところであつた。華訳中に，割書してそれらを注する所以である。

上記デュ・ボアゴベイの『鉄仮面』が重訳されたのも，この年である。これは，素材そのものが怪奇的で，探偵小説以上に面白い。鉄の仮面を被せられて，バスチユ他一二の牢獄に三十年も幽閉され，生涯を終つた悲劇の人物は誰か。ルイ十四世と美人の噂さの高かつたルイズ・ド・ラ・ヴェリエールとの間に生れたヴァルマンド大公なのか，ルイ十四世と双生の兄弟なのか，生母アンヌ・ドートリッシュと妖僧マザランとの間の私生児なのか，君権神授説を唱へたルイ十四世は僭王で，実はアンヌの産んだ件の私生児であり，鉄仮面の主こそ，本当のルイ十四世たるべき人であつたのか等々，諸説紛々として，詳らかでなく，それ故にこそ詩・劇・小説に素材を提供してゐるのである。<sup>21)</sup> だから，当然此処で取扱つても差支へないのであるが，やはり本質的には伝奇小説の部類に入れるべき性格のものであらうし，華訳も亦「歴史小説」と角書きしてゐるから，今は採り上げない。一には，君朔（伍光建）訳『俠隠記』（Alexandre Dumas père: “*Les Trois Mousquetaires*”）・『続俠隠記』（Ibid: “*Vingt ans après*”）・『法宮秘史』（Ibid: “*Le Vicomte de Bragelonne*.”）や，上記

21) 江戸川乱歩：前掲書，pp. 313-316；マルセル・パニヨル著，佐藤房吉訳『鉄仮面の秘密』（Marcel Pagnol: “*Le Secret du Masque de Fer*.” 1969）

『大俠紅紫落伝』などを含めて併せ論じ、清末民初の武俠小説・歴史小説との因縁を考察したく考へてゐるからである。

因みに、この年には、涙香物と認められる次の二書が訳されてゐる。

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
妖塔奇譚 二冊	美・佚名氏	無欲羨齋訳	広智書局	光緒三十二年 (1906)

(黒岩涙香訳『<sup>奇談</sup>幽霊塔』か)

莫愛雙麗伝	涙香小史訳	佚名訳	有正書局	同
-------	-------	-----	------	---

(黒岩涙香訳『古王宮』か)

共に未見であるから、大胆な推測を試みる以外にないが、前者は、恐らく『幽霊塔』であらう。原作はベンジソン夫人の『ファントム・タワー』(Mrs. Bandison: “*The Phantom Tower.*”) で、夫人をアメリカ人とするのは訳者の誤認であらう。イギリスの作家である。

『莫愛雙麗伝』も、阿英氏の『書目』によつて知る以外に、知るところはない。『古王宮』の重訳と判断するのは、小説中、故柳園伯爵の居間に掲げられてゐた古水保治の母の肖像の下に「愛せり失へり」とあり、遺産に目が眩んだ菱江が、心を許してゐた戈田武男との交情を捨てて、保治との結婚を承諾する辺りに、華訳名の由来があると想像するからである。若し、この推測が許されるとするならば、包天笑訳『古王宮』(『月月小説』第二卷第十・十二期、光緒三十四(1908)年十月・十二月)と、同一書の別訳といふことになる。原作は、バアサ・クレイの『我が身との戦ひ』(Bertha Clay: “*At War with Herself.*”)と言ふ。勿論、探偵小説ではなく、家庭小説として扱ふべきものであるから、此処では除外してよい。

本題からは逸れるが、涙香訳によるバアサ・クレイの作品は、翌光緒三十三年(1907)年にも出てゐる。商務版『説部叢書』第九集第五編(初集本第八十五編)及び『小本小説』に収める

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
鴛盟離合記 二冊	日・黒岩涙香	湯爾和訳	商務	光緒三十三年十月 <sup>22)</sup>

(黒岩涙香訳『人の妻』の重訳。原作は、Bertha Clay: “*A Women's*

22) 刊記は上海図書館編『中国近代現代叢書目録』に「1907年10月版」とあるに拠る。

*Error.*”)

がそれで、阿英氏の『書目』には光緒三十三年刊とするが、管見に入つたものには、「戊申正月初版」とある。記者湯爾和は、光緒二十九(1903)年、我国に派遣された最初の留日学生の一人で、民国二十七(1938)年、北支臨時政府が成立した折に、推されて教育総長となり、北京大学総監督・東亜文化協議会会長などを兼ねた人。中国医学界にも大きな足跡を遺した。この訳は、金沢の医学専門学校に学んでゐた当時の手すさびに成るものであらうが、人が人だから、一寸書き添へて置く。

同じく、光緒三十三年には、既述の

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
色媒図財記 <sup>二十回</sup> <sub>三冊</sub>	日・涙香小史(著)	黄山子訳	改良小説社	光緒卅三年 (1907)

が出てゐる。これ亦未見の訳であるが、書名から推すと、或いは『似而非』、改題して『悪党紳士』(明治二十三年三月、明進堂刊)ではなからうか。とすれば、原作はデュ・ボアゴベイの『他言無用』(du Boisgobey: “*Bouche cousue.*” 1883.), 英訳名『封ぜられし唇』(“*Sealed Lips.*”) といふことになる。

翌光緒三十四年(1908)には、

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
天際落花	日・黒岩周六(著)	褚靈辰	商務	光緒卅四年五月 (1908)

(黒岩涙香訳『塔上の犯罪』の重訳)

が出た。これは、もと商務版『説部叢書』とは別の企画で上梓されたものらしいが、故あつて『佳人奇遇』が削られることとなつたので、その差換へに充てられ、初集本では「第一編」として収められ、後『小本小説』にも収められた。

又、涙香訳『塔上の犯罪』は、当初『此曲者』と題して『江戸新聞』(明治二十二年十一月三日～至二十三年一月二十八日)に訳載、同年四月二十五日薫志堂から上梓されたが、翌二十四(1891)年十月再版の際『塔上の犯罪』と改題され、この名が通用されてゐる。その原作について、柳田泉教授は「フォルチュネ・ボアゴベイ “*The Angel of the Chimes.*”」とされ、田中潤司編「海外探偵小説総目録」には “*The Angel of the Bells.*” の名を掲げて、「フラン

ス原本中にそれらしき題名の見当らぬもの」に数へてゐる。共に誤つてはゐないが、十分ではない。蓋し、前者がグリーンング社 (Greening & Co., London) から出版されたのは1903年(明治三十六年)、後者が『オルディン近代小説傑作選』(Aldine Masterpieces of Modern Fiction.) 中の一冊として出されたのは1897年(明治三十年)で、涙香訳よりも数年乃至十余年も遅いからである。デュ・ボアゴベイのこの原作は、実は『青いヴォワレット』(“*La Voilette Bleue.*” 1885.) といふので、涙香が扱つたのはマックスウェル社 (J. & R. Maxwell, London.) から出された『パリジャン文庫』(“*Parisian Library*”) 中の一冊 “*The Blue Veil. ; or the Angel of the Belfry.*” 1886. であることは、まづ間違ひない。これにも、‘Author’s copyright authorised translation.’ といふ注記がある。他の場合も併せ考へて、涙香は、当時日本では未だ十分に認識されてゐなかつた著作権問題に、いち早く関心を寄せた一人であつたと見たい。

さて、華訳は、涙香訳で五十回のもを三十五回に縮訳したからやや筋を逐ふことに急で、涙香訳の話術の面白さは殆んど窺はれないが、誤訳・珍訳の類はほとんどなく、訳文自体も割にしつかりしてゐる。以下、訳例として、ノートルダム塔に遊んだ村田菜園が、折柄起つた女性の墜死事に捲込まれ、取調べられる条りを抄出する。

警察長起趨旁室曰、与君入此。及入則空亡所有、陰慘之氣、令人毛髮俱戴。中惟一長案、而粉梨雨碎之屍、僵陳其上、油巾覆焉。警察長揭巾引使近之。紳士出自意外、肺葉震擊、洵懼幾仆、俄即自振曰嘻、一不相識之燕、而謂余攜之者。警察長亦頗為回惑。使其所私、而又新置之死、就令彼狡亡情、亦胡能坦然故為斯語。豈婦者一婦人、死者又一婦人耶、而狂且之為暴行者、設匪彼則又伊誰。警察長告之曰、諸証人所言、誠不足以實君之罪、亡已、余即命遷此屍、列之穆耳古之死骸縱覽館、不出三日、当有能道其里居姓氏者、莫患亡端倪也。惟君鉗口雖密、使君之名而亦不及聞。則余職之謂胡、尚願述之、且家胡許、業胡許乎。紳士堅執如故曰、余終一切不能答。警察長曰、不答則亡他法。惟有權認為罪人、交之予審之裁判官而已。紳士曰、裁判官且奈何。警察長遂亡復与言、命二警察亟舁死骸往縱覽館、

並語三証人、明日或即予審、伝噤君属。君属胥出而自以紳士去。

(華訳文 第四節、涙香訳文 第三—第四回)

涙香訳から重訳された小説は、以上の他にもある。前に『古王宮』を訳した包天笑などは涙香の大ファンであつた。彼には、『人耶鬼耶』の別訳『人耶非耶』(『小説大観』初載)があつて、『海上五十名家小説滙海』に収められてゐたと記憶するし、『巖窟王』を訳して『大宝窟王』? と題した訳本もあつた筈である。もつと有名なのは、『空谷蘭』。これは涙香訳『野の花』(Mrs. Thomas Hardy: “*The Mother’s Heart.*”)の重訳だから、勿論家庭小説の部類に属するが、脚色されて新劇(話劇)の舞台に上り、又「新京劇」と銘打つて「新舞台」(劇場)でも上演され、民国十五年には上海明星影片公司以映画に製作されて、大当たりをとつた。<sup>23)</sup> 実に、涙香は、明治大正の文壇人中最も深い影響を彼に与へた一人と言つて差支へないのである。

#### (v) その他の翻訳

勿論、日本訳から重訳された探偵小説は、蘆花や涙香物のみには限らない。光緒二十九(1903)年から翌年にかけて上梓せられた陳冷血訳『偵探譚』は、既述の様に涙香の『三筋の髪』(『無惨』と原題された作品の方である)を収めるが、他にも尚数篇の翻訳を収めてゐる。今、阿英氏の書目によつて「偵探譚」の内容を細叙すると、次の如くである。

偵探譚	冷血訳	四冊	
第一冊	鈕永建校	光緒二十九(1903)年	時中書局刊
	法・西余谷：游皮；	中村貞吉：大村善言	
第二冊		光緒二十九(1903)年	時中書局刊
	渡辺為蔵：関口太三郎；	法・彭脱：格兒奇特；	上野和夫：
	松野貫一；	英・皮登：梅 脱；	英・皮登：落勃脱
第三冊		光緒三十(1904)年	開明書店刊

23) 包天笑「我與電影」(『鈞影樓回憶錄統編』所収)。范煙橋前掲「民国旧派小説史略」六「翻訳小説」の項。

## 涙香女史：三縷髮（涙香『無惨』）

第四冊

光緒三十（1904）年

開明書店刊

美人狩

（芙蓉生訳『美人狩』の重訳か。芙蓉生は硯友社同人といふ。『美人狩』は、春陽堂版『探偵文庫』に収める。）

美・吐司愛沙：自殺倶楽部

未見の資料なので、大胆な推測を試みることになるが、本書に収めるものは、凡て日本語から移したものであらう。

陳冷血には、翌光緒三十（1904）年にも、『虚無党』があり、渡辺為蔵の『綺羅沙夫人』や田口掬汀の『加須克夫人』（原題『魯国奇聞虚無党』、『文芸倶楽部』明治三十六年十二月号）などを収めてゐるが、今は再説しない。<sup>24)</sup> 同年中には、他に『繡像小説』第二十一・二十二期（光緒三十年二月）所載の『俄国包探案』や三十一期（光緒三十年七月）以降に掲げられた『売国奴』がある。

前者は、恐らく水田南陽の『露国怪物探偵魔王』（明治三十七年一月『中央新聞』）なるべく、後者はゾーデルマンの『猫橋』（Sudermann: Katzensteg）で、登張竹風訳による重訳である。探偵小説的な興味もあるが、探偵小説として扱ふには問題があるから今は省いて簡に従ふ。ただ一つ、見逃し得ないのは、美・楽林司郎治（Lawrence Lynch）原著『毒美人』が『東方雑誌』第一巻七号（光緒三十年七月）以下に連載されてゐることである。これは、同年中に単行上梓された『黄金血』（後、商務版『説部叢書』第一集第十編として収む）と同一のものであるが、何故か単行本では原作者の名が削られてゐる。物語は、母方の遺産相続権を有つイギリス女性が、格倫維爾鎮で塾を經營する字労来を手始めに、相続権を有つ縁者を次々に殺して行くといふ恐ろしいもの。リンチの作品目録を調べて見ても、それらしい作品は見当らないから、原作未詳と答へる以外に方法はない。注目すべきは、華訳中に、「中学」・「生徒」・「汽車」・「自転車」・「鉛筆」・「円」（貨幣単位）など、日本語から流入したと見られる語彙が散見されることで、訳者が直接扱つたのは日訳であつたに相違なく、

24) 拙稿「晩清に於ける虚無党小説」参照。

多田省軒訳『毒美人』（明治二十九〔1896〕年三月、盛花堂刊）がそれではないかと想像するが、未だ比照を試みる機会を得ない。以下、冒頭の一節を掲げて、他日の研究に備へよう。

格倫維爾鎮，達於某湖浜。湖故衆水所匯，一面山巒起伏，草木蔥鬱，与地平同尽。四時風景，雅足動人。時五月某日，晨鐘纔八下。鎮中街衢寂靜，惟数童子奔走跳躍，逗遛道中，蓋将入学塾而偷間於此也。

学塾在鎮極南山坡上。塾初建於湖浜，湖多柳樹。格倫維爾以此塾為首創公宅，尋以他事遷此，居民亦漸多，自五十家增至千余，而旧塾勝地，遂為銷夏別墅，且市肆第宅，漸推广至北境，新塾独処鎮南，林木環繞，饒有佳景，其地当湖旁第二帶森林。東望峯巒蒼翠，遠連天際。

方新塾落成時，格倫維爾鎮少長咸集。婦女亦有至者，羣立院外，仰見塾高二層，皆黃漆，光可鑑人。衆正紛忙擬懸新鐘。有伊利亞勞平者，居此鎮最早。建此塾与有力者，曰，是宜名中学校。諒衆意無阻我者。約翰洛脱曰，是名甚当，必無阻礙。復一人曰，是名頗合愚意，度亦不忤衆情，派森臘愛特独揺首微笑，曰，吾鎮僅一小材，恐不能居高等之名，如欲名之。惟就地勢高峻言或可。然吾必望其扩充，庶幾名实相称。此当日設塾命名之大略也。其後是塾僅盛於夏季，至今猶是一村塾。塾中正教一人，助教或蒙師一人。

この小説は、かなり好評であつたらしい。『小説経眼録』に、

美国楽林司郎治原著。是書記美人李劳来設塾於格倫維爾鎮，被傑姆森槍斃一案。経偵探福拉史偵破，其中情節變遷，頗有出人意表，亦足見西人偵探之術精矣。

とあるのが、注目される。

翌光緒三十一（1905）年十二月には、少しく風変りな小説が華訳されてゐる。

（華訳名）	（原作者）	（華訳者）	（発行所）	（刊年）
偵探小説 車中毒針	英・勃拉錫克	呉 櫛	商務	光緒三十一年十二月 (1905)

（石井ブラック述・今村次郎筆記『車中の毒針』の華訳）

がそれで、商務版『説部叢書』第三集第十編（初集本第三十編）に収める。ブラックの原作は、明治二十四（1891）年十月、三友社刊。石井ブラックは、本

名ヘンリー・ジェイムズ・ブラック(Henry James Black. 1857-1923)といひ、帰化英人であるが、日本語を巧みに操り、快樂亭ブラックと号して高座にも上り、人情哢を得意とした。今日でこそ、この種のテレビ・タレントは珍らしくないが、当時は非常に珍しい存在であつた。その為人については、正岡容の「英人落語家ブラックの探偵小説」<sup>25)</sup>が要を得てゐるから、一寸借用しよう。



明治年代、西洋人情哢を以て、よく大門朝、初

代燕枝に拮抗したる存在に、英国人の落語家快樂亭ブラックがあつた。

……(中略)……ブラックは、幕末、ジャーナリストたりしその父君に連れられて渡日、父と共に『日新真実誌』なる新聞事業に挺身したが、明治初年、自由民権の演説流行に刺戟され、先づ演説より講談席へ、次いで三遊派一方の重鎮たり得て、大正癸亥の大震前後、歿した。異邦人にして本朝寄席文化史上、大看板の足跡をば残したのは、奇術の李彩、音曲のジョン・パールと共に、この快樂亭ブラックであらう。

少しく注釈を加へると、彼の父ジョン・レディ・ブラック (John Reddie Black. 1827-1889.) は、スコットランドに生れ、Blue-Coat School の愛称で親しまれてゐる Christ's Hospital に学んだ後、海軍に投じたが志を得ず、除隊して濠洲に赴き商業を営んだ。しかし、これも思はしからず、廃業して故国に帰る途中日本に立寄つたのが、その生涯を決定する契機となつた。彼は、始め横浜で『ジャパン・ヘラルド』(The Japan Herald.) を経営する A. W. ハンサード (A. W. Hansard) に乞はれてその主筆となり、ついで『デイリー・ジャパン・ヘラルド』(The Daily Japan Herald. 1863年10月23日創刊)・『ジャパン・ガゼット』(“The Japan Gazett.” 1867年10月12日創刊)を興し、又『日新真事誌』を創刊(1872年3月17日)した。『日新真事誌』は、我国初

25) 正岡容「英人落語家ブラックの探偵小説」(『寶石』昭和二十二年一月号)。赤羽絹子「J. R. ブラック」(昭和女子大学編『近代文学研究叢書』第一巻所収)。その他。



の邦字新聞とされるものである。彼は、明治文化界の在野の恩人で、確か初期音盤史上にも登場する筈である。

ヘンリー・ジェイムズは、ジョン・レディの長男として、恐らく濠洲で生れ、横浜で育つたのであらう。長じて、浅草猿楽町の菓子商石井アカを娶り、石井ブラックと名乗り、快樂亭と号して高座に上つたが、その生活は放縦であつたといふ。幾許もなくして妻と離別したが、石井ブラックの名は通した。彼の話術は、円朝や燕枝に拮抗したといふのであるから、全く素人離れしたものであつたらしいが、落語界に於ける柳家一派の凋落と共に高座に上る機会を失ひ、地方巡業などする裡に兄妹にも不義理を重ね、神戸で窮死した頃は悲惨を極めたといふ。

彼にはブラッドン女史の『花と雑草』(Mary Elizabeth Braddon: “*Flower and Weed.*”)を口述した『紫陽草葉の露』(市東謙吉筆記。明治十九〔1886〕年十二月、金港堂刊)はじめ、原作未詳の『紫陽幻燈』(一名『岩出銀行血染の手形』。今村次郎速記。明治二十五年十二月、三友社刊)などがあり、『車中の毒針』も亦その一である。『車中の毒針』については、水石隠士の序に、

西洋小説に貴ぶ所のものハ其趣向の雄渾奇響にして変幻測るべからざる在り。然りと雖ども之を訳し之を筆する苟も其人を得ざる時は情味索然として捕風拿影の憾ミなき能はず。今這篇を読むに作意の奇雋なるは固より言はず、ブラック氏が之を演ずる流鬯なる今村氏が之を記する熟鍊なる、迅雷一轟而邪影を潜む

とあるから、翻案物であることは明らかであるが、原作が何かは詳らかでない。以下、訳例として、巻末に近い一節を掲げてみる。

伊季兩人一直同走到支家左近。季恩拉立定道，伊達峨先生，你只在這裏等我，待我入去一查。若是三十分鐘後，我不出來，你趕緊到警察衙門通報此事，喚同幾箇巡捕，圍住支家。一箇一箇的捕拿，不許逃走。我身上有印記帶着，如今將來交給了你。三十分鐘我不出來，那必然受了他的傷害，你可要替我報仇。伊達峨道，季恩拉先生，怎說那樣怕人的話，偵探的職司，本來是危險的咧。季恩拉道 為了職司而死，那是分所當然。但我不能不依舊裝做耳聾。我和支梯垂在酒店中曾經見面，已是彼此認得，若說到特地登門

前來查訪的話，他知道我是包探。那能還肯讓我得生，我若不能勝他，也情願死在他手。因此上，這裏就和先生拜別。從此或來世相見，也未可知。伊達峨道，噯喲噯喲，這事危險，明明自投羅網了。季恩拉道，噯，兵士上了戰場，誰知道什麼時候生死。那些兵士們，為國宣勞，不惜身命，為君為民，博得箇忠義之名。我做偵探的，隨時隨地，也拿着性命去博，却是為的歹人惡棍。但只還是為的法律，為的愛國之心，也是責任上應有的義務。總之三十分鐘後，若不好好出來，直當我是已死，為我復仇。全仗你伊達峨先生。說罷，反身趕一步走到支家門前。

（原文第十二回／華訳 第十三回 巧偵）

原文は、もともと高座にかけたものを速記したのであるから、当て込みもあればチャリもある。さうした無駄を削つて訳出した華訳者の態度は、当然採らるべき方法として、認められてよい。しかし、さうしたことよりも筆者に興味があるのは、かうした口述筆記の翻訳から、白話文学の得たものが勘からずあつたらうといふことである。が、今はそれを考へる余裕はない。

ブラックの作品は、光緒三十二（1906）年にも訳されてある。前に一言した笑我生訳『血手痕』（『江西』所載）がそれで上記『幻燈』の重訳であらうことは、想像に難くない。

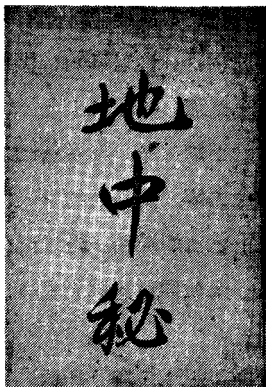
同じ光緒三十二年には、又

（華訳名）	（原作者）	（華訳者）	（発行所）	（刊年）
地中秘	日・江見忠功	鳳仙女史訳	広智	光緒三十二年七月

（江見水蔭作『地中の秘密』）

が出た。水蔭の小説は、明治三十五（1902）年四月、青木嵩山堂から出版された。「硯友社」同人の一人であつた彼等が、何故探偵小説に筆を染めるに至つたかについては、水蔭自らの文章があり、それを引用しての柳田泉先生の研究があるから、<sup>26)</sup> 更めて説くまでもない。何れにしても「春陽堂」の商策に乗ぜられ、又意識しつつこれに応じたのであつて、作品としてはこれと言つて見るべきものはない。華訳されたのも、ただその名に惹かれたか、取付き易かつた

26) 柳田泉「隨筆探偵小説史稿——二〇、探偵小説全盛と春陽堂の共同策」（『統隨筆明治文学』所収）。



といった程度のものであらう。訳者香葉閣主人鳳仙女史は、涙香の『片手美人』を重訳した人物で、勿論仮託の名であらう。訳例として、稲妻塚発掘の一節を、一寸引いて置く。

既至。人類学者西岡純次郎、先就塚外四周審諦、覺其略帶覆瓢狀、而実為饅頭形、知為奈良朝以後之古塚。

奈良朝為日本元明天皇至光仁天皇時代、即我国唐睿宗至代宗時代。距今約一千二百年

至一千百三十年間。

又思此貝塚村名義、必為近古新成之洲渚。其形勢東南連於大陸、西北面海、知必無石器時代、所謂国栖土蜘蛛等種属遺蹟。

大和民族凡八種、除天孫出雲二種、為高天原正系統外、又有熊襲、隼人、熟蝦夷、国栖、土蜘蛛、及韓漢遺民諸族相混。而以国栖、土蜘蛛兩種族為最古。

然此塚以稲妻命名、其義甚奇。『稲妻』為陰陽兩電激盪之稱。(日本名義)於義何取。其或者為火雨塚相伝之誤也耶。？

觀此塚形不甚崇偉。然既費若許心力。始得至此、好歹且一発視之。

於時對吾作曰、『僕欲假翁之力、即此地。請就此辺試掘之。』

吾作応諾。於是卸其鍬鋤、以兩手枢衣、綴於腰間帶。復提鍬、遂肆力焉。

時西岡亦解其外服、去其坎肩、并除脱其着結(即西服以堅白之布為領袖之内衣)。惟余襯衣、持吾作荷來之鋤、偶力相助。

墳形雖古、然土質甚鬆。鍬鋤并下無幾時、而穴已深五六尺。

西岡思貝塚二字、若名実相副、此問當已見螺蛤遺蹟、今仍不見。然則或果為古塚耶。？ 遂更注意掘之。

未幾復下二三尺、吾作之鍬、忽着一物、訇然有声。

吾作曰、『好了。！ 此非金釜声耶。？ 想其中不知充物若何珍物矣。』

(第三章 発掘)

例文としては、やや特異な個所を選び過ぎた様だが、水蔭はこの頃相樸と土

器蒐集に夢中だつたので、かうした小説があるのである。訳文中に屢々注釈的  
文字を挿入してゐるのは、『佳人之奇遇』あたりの悪い意味での影響であらう  
が、それにしても拙い。同人訳『美人手』の訳文と較べて見ると、これが同一  
人の手になるのかと疑ひたくなる様な文章である。どうも、翻訳文といふもの  
は、原文の良否によつて、かなり左右されるものだといふことを、更めて教へ  
られる想ひがする。

×                      ×                      ×                      ×

結論を急がう。清末民初に日本語から翻譯された探偵小説は、勿論以上に尽  
きるものではない。例へば、手許のノートには、当時の新聞（民国四〔1915〕年  
十月頃の『順天時報』であらう）から抄出した次の様な広告文が残されてゐる。

△偵探小説 吳田雪冤記    洋一冊    洋一角五分

此為日本近日三大疑案，兩為吳田偵出，一為吳田之子偵出。三案之離奇，  
為從所未有。吳田精銳之眼光，靈捷之手段，亦与著名之福爾摩斯不相上  
下。愛読偵探小説者，当歡迎恐後也。

△偵探小説 秘室

是書叙日本高輪子爵，以紳士而為盜魁。其秘密機關，不在空中，即在地  
下，却人掠財，來去無跡。其中秘密室，低於海面一二万尺，被物於室中  
者，必無生理。其中如压搾室，如無空氣室，如毒蛇之窟，如妖巫之窟，  
慘酷怪誕，為意想所未到，其防守亦異常周密。卒經博士樫田茂，偵探長  
後藤，先後身歷，其間相与定計，破其巢穴。後藤以此得名，而博士已身  
為之殉矣。

前者が、三津木春影訳『探偵奇譚・吳田博士』（明治四十四（1911）年十二月、  
中興館書店刊）の重訳で、華訳名に「雪冤記」とあることから推すと、殺人罪  
に問はれて死刑の判決を受けんとする一少年が、慧眼なる博士の手によつて青  
天白日の身になるといふ例の「恐ろしき夢中の犯罪」を含む三篇の抄訳であつ  
たかと思られる。原作は、春影自ら「英国のオースチン・フリーマン氏の近著  
『ソーンダイク博士の探偵事件』といふ書中の四五篇を翻案したもの」（序）  
と言つてゐる様に、Austin Freeman (1862-1943) の“*John Thorndyke's  
Cases.*” 1909 に収める八篇の短篇から五篇を選んで翻案したものである。翻

案に際して、春影は色々な要素を混へたらしく、原作の認定出来るのは、「奇絶怪絶!! 飛来の短剣」が「アルミニウムの短剣」“The Aluminium Dagger.”の翻案であるといふ位のところらしいが、上記田鑄訳に次ぐフリーマンの作品の紹介として、注目される。因みに、『呉田雪冤記』の書名は、文明書局関係の出版物の広告に見出されるから、同書局の出版であるに違いない。

後者が何であるかは、目下のところ想起し得ない。高輪子爵の様な人物が登場するところを見ると、探偵小説とは名のみで、『ジゴマ』流の赤本であるかも知れない。こんな例は、拾へば幾らも見出し得ることであらう。

上に『順天時報』を引いたから、序でに当時の日系漢字新聞が、かうした風潮にどの様に対応したかについて、古いノートを繰ってみる。と、まづ、目に着くのは、『同文滬報』七三九六号（光緒二十九〔1903〕年二月四日・明治三十六年三月二日附）に掲げる「繙訳探偵小説序」と題する一文である。「獄訟者万民之命、而天下治乱之原也。獄訟平則民安、民安則天下治。獄訟不平則民危、民危則天下乱。古之聖帝明王之於獄訟、莫不兢兢然云々」に始まり、三権の分立、就中、当代に在つては司法警察制度の確立の重要性を説き、その為の便法として探偵小説を普及さすべきである。ここに「本館主筆妍雅齋主人、比来取泰西偵探小説善本訳之、逐日刊於本報副張附行、訳畢且彙而刊之、為単行本広流伝云々」と結んでゐる。これが、如何に素早い対応の仕方であつたかは、上來縷述し来つたところに照して、明らかである。では、どの様な作品が訳載されたか。既述デュ・ボアゴベイの『決闘縁』が、その一であらうことは想像に難くないが、未だ確認出来ない。蓋し、手許のノートに記された同紙の副刊「消閑録」の抄出は、四六九号（光緒三十一年一月十日・明治三十八年二月十三日）以降のものばかりで、しかも波蘭滅亡の故事を劇本に仕立てた『流血英雄』とか、『東欧女豪傑』の影響作品と見てよい『松陵新女兒伝奇』といった政治小説が多く、肝心の探偵小説がないからである。

上海の『同文滬報』に対して、北京の『順天時報』はどうであつたか。光緒二十九(1903)年頃から三十(1904)年にかけての同紙は、経営が決して楽ではなかつたらしい。スタンダード型からタブロイド型に変わり、又旧に復するといつ

た状態を続けてゐる。が、光緒三十一(1905)年に入ると経営も安定して来たらしく、同年暮には懸賞小説募集を行つてゐる。黒岩涙香が『万朝報』で試みて成功した故智に倣つたものであるが、中国の新聞界では画期的な初の試みであつたらう。かくて、翌三十二年からは、「割記小説」・「演東齊諧」・「東洋小説」といつた欄が設けられ、「俠美人」・「女騙」・「芭蕉翁」・「京伝記」・「沢鷺君」・「芳流閣格闘」など、川田甕江の『譚海』や菊池三溪の『訳準綺語』に収められるそれが、抜萃掲載されてゐる。さうした後を承けて、一四七五号（光緒三十二年十二月十一日・明治四十年一月二十四日）から一四八二号（同十二月十九日・同二月一日）にかけて、「偵探奇談」が掲げられてゐる。1905年のノールウェイとスウェーデンとの確執を主題にした国際スパイ小説だからオープンハイムカル・キュー乃至はアレン・アップワードあたりの作品だらうが、直訳ではなく日訳からの重訳らしい。もつとも、同紙は探偵小説に格別の力を注いでゐる訣ではなく、右に続いてナポレオン一世麾下の独眼竜將軍某を扱つた「雄雌譚」や法国・黎伊孟德原作『景島海上神童』といつた小説を、次々と掲載してゐる。『海上神童』は、英・里門德原作、馥忱訳『海上健児』（『大陸』所載）と同一書の別訳であらう。それはともかく、さうした小説の選択ぶりから見て、件の「偵探奇談」が、探偵小説的な興味から採られたものでないことが決る。

奉天で出されてゐた『盛京時報』（光緒三十二年九月一日創刊）になると、その傾向は、少しく対称的である。同紙は、創刊後間もない頃から、「演説俄国压制家之結果並歴史」・「外籟英法条約与坤角」（共に掲載号忘失）といつた種類の小説が掲げられるが、やがて「偵探外交消息奇譚」（自九十三号至九十六号。自光緒三十三年一月一日至一月九日）・「偵探奇譚」（自百三十一号至百五十一号。自同二月二十五日至三月十四日）、「德皇赴法被執下獄」（自百六十四号至百七十二号。同三月二十九日至四月十日）と、国際スパイ小説を掲げること頻りである。土地柄と言ふべきか。これらの文字は、再び活字となつて陽の目を見ることはあるまいから、一つだけ抄出して見本とする。

西洋著名文学家孟巴山曰、歴史家欲知世界之事變百出言之趣味津々者、莫如読偵探歴史之所注眼。即各国所謂無政府党是（虚無党）也。此言善矣。学者以此言為瘋狂、而政治家則引以為政党。但其視無政府党、懼之如虎、

惡之如蛇，皆毫無異也。

奥国皇后葉里薩卑斯，為刺客所鎗斃，歐美各国人心惶驚，市虎之徒，乘此妄造遙言，煽惑愚民。於是義皇恒勃爾特恐禍巨測，邀集外交家警察官等，在伯也尼斯府，商榷根絕斯党之法。其時余上言云，每年給予以二万磅（二十萬元），予必設法保護各国帝王，以預防若輩之行刺。嗚呼。二万金之生命保險，豈不廉哉。然衆皆不之信，唯託余以暗查無政府党情形。

（偵探外交消息奇譚）

序でを以て言へば，上記「百合花」に始まるこの種の小説は，この時期にかなり流行した。曼陀訳『竊電案 一題曰英同盟電被盜案』（光緒三十三年，小説林社刊），英・白福蘭著・大妙訳『竊凶案』（競立社『小説月報』同年），羅人驥訳『外交秘鑰』（『小説林』第十一期。光緒三十四年五月）——何れも，日訳からの重訳であらう——などの流行は，さうした風潮を物語る。この風潮は，民国に入つても暫く続く。民国元年（1912），商務印書館訳印の『外交秘事』は，紫草千葉亀雄纂訳『最近外交秘密』（博文館，明治三十八（1905）年の華訳である。

却つて説く，これを要するに，当時の日系漢字紙は，本格派の探偵小説の紹介には余り熱心であつたとは言へないが，中国系の新聞には，かなり文芸記事に力を注ぎ，探偵小説なども随時掲げたものがあるらしい。上海の『時報』などは，陳冷血が主筆であつた関係から殊に熱心で，他の一般の通俗小説・詩話・評論に混へて，探偵小説も屢々掲載された。上記した陳冷血の『福爾摩斯來華偵探案』もさうであるが，『火裏罪人』（三宅青軒『火中の美人』の訳であらう）が記憶に遺つてみると，胡適氏は追想してゐる。（「十七年の回顧」）

× × × ×

如果有人問，晚清的小説，究竟是創作佔多數，還是翻譯佔多數，大概祇要約略的了解當時狀況的人，總會回答，「翻譯多於創作」。就各方面的統計，翻譯書的數量，總有全數量的三分之二，雖然其間真優秀的並不多。而中國的創作，也就在這洶湧的輸入情形之下，受到了很大的影響。

とは，阿英氏が『晚清小説史』第十四章「翻譯小説」の冒頭の一節である。或いは人あつて，如上の阿英氏の設問に倣ひ，「在翻譯小説裡，一般小説佔多數，

還是偵探小説佔多数呢」と質問するならば、筆者は、『後者が前者を凌駕するかも知れない』と答へるだらう。勿論、この場合には、虚無党小説・国際スパイ小説・冒険小説・悪党小説や伝奇小説のある種のものなど、怪奇・探偵小説的傾向のあるものは、全て含ませて頂く。とすると、少く見積つても清末小説約一千一百種の内、凡そ三分の一が翻訳探偵小説乃至は探偵小説的な要素を有つ作品であるといふことになる。これだけ多量の小説が、近々十数年の間に海外から流入したとすれば、その影響が見られない筈はない。既に、翻訳界の老手周桂笙に「上海偵探案」や「玄君会」があれば、陳冷血には「福爾摩斯來華偵探案」はじめ、翻案とも創作ともつかない虚無党小説が数多くある。傲骨の「中国偵探砒石案」・同「鴉片案」、哀民の「三大案」・呂俠の「中国女偵探」等々、それと覚しき作品の名は、阿英氏の『晚清戯曲小説目』を繰れば幾らも拾へるであらう。民国に入ると、『小説時報』（1909年9月創刊、其社）・『小説月報』（1910年7月創刊、商務印書館）・『中華小説界』（1914年1月創刊、中華書局）といった雑誌の他に、『偵探世界』（1923年創刊、世界書局）・『大偵探』（1946年創刊、第一編輯公司）といった専門誌も生れるし、『福爾摩斯報』（1926年創刊）なる小報も誕生し、上述した程小青の霍桑もの・孫了紅の魯平もの・陸澹盦の李飛ものが大衆の人気を浴びるし、本格的な探偵小説を書いた翕天憤、「門角落里福爾斯」を自称する趙苕理も活躍する。その他、徐卓呆・王天恨・張碧梧・范煙橋・孫玉声（漱石生）・何朴齋・徐恥痕・張舎我・范佩萸・胡寄塵・馬二先生・范菊高等々、大小さまざまの大衆作家が、一度は探偵小説への挑戦を試みてゐる。だが、かうした盛況にも不拘、中国の探偵小説界は、未だ眞の傑作を産んではゐない。全体としては、低調なのである。その原因には色々なものが考へられよう。近代化への立遅れは、物理・化学といった面ばかりでなく、社会科学（警察組織・刑法の制定）の面でも認められるが、何よりも注目しなければならないのは、内戦に続く抗日戦争といふ不安定な時代を経て来たことであらう。「娯楽としての殺人」や謎解きに心を遣るには、何よりも民生の安定が必要なのである。

因みに、清末の文学は、韓国文壇に影響し、韓国新文学の胎動を促す。1912年、京城の東洋書院から刊行された「小説叢書」は、装幀からして商務版『説



部叢書』に仿ふものであるが、同叢書に収める関澹稿訳『指環党』や某訳『一万九千磅』は、何れも華訳から韓訳されたものである。従って、『指環党』の如きは、原書（フランス語）から英訳→日訳→華訳→韓訳と重訳されたことになる。涙香物の韓訳には、他に李相協訳『貞婦怨』（涙香訳『捨小舟』）、何夢・李相協訳『海王星』（涙香訳『巖窟王』）、関泰媛訳『哀史』（涙香訳『噫無情』に抛るといふ）などがあるが、それらの比較研究は、今後に残された課題であらう。

（なかむら ただゆき）

〔附 記〕

- I). 本稿を執筆するに際し、資料の蒐集に、印刷・校正に、樽本照雄君から多大の御高配を忝うした。銘記して謝意を表する。
- II). 邦訳されたディック・ドノヴァンの作品として、次のものがあることを、中島河太郎氏から御教示頂いた。
- |     |           |       |         |
|-----|-----------|-------|---------|
| (1) | クキンスフェリ事件 | 『新青年』 | 大正十三年三月 |
| (2) | 黄 星 章     | 同     | 同 年八月   |
| (3) | 髑 髏 盃     | 同     | 同 十五年四月 |
- III). 又、シカゴ大学 Far Eastern Library の馬泰来氏からも、次の教示を得た。

来近日重編林紆翻譯小説書目、復考出原著三種、想亦先生所樂聞。

一、柯南達利 Arthur Conan Doyle 之“電影樓台”為 The Doing of Raffles How.

二、其“蛇女士伝”即 Beyond the City.

（此二種附原著及林訳首頁書影）

三、林氏亦嘗訳 Nick Carter 小説。此即尼可拉司 Nicholas Carter 之“焦頭爛額”。是書包括小説三篇：“豹伯対象”・“徳魯曼”及“火車行劫”。“豹伯対象”即 The Dumb Witness., 另外二篇因乏原書、未能考出。（Chicago 大学所蔵 The Dumb Witness 破殘甚、不克複影）。

末筆ながら、中島・馬二氏の厚情に深謝する次第である。